
風の聖痕 秘伝 （隠された血脈 業火の炎）

将真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の聖痕 秘伝

（隠された血脈 業火の炎）

【Nコード】

N6587M

【作者名】

将真

【あらすじ】

神風一族、それは古の頃より退魔を生業とする炎の精霊王の加護を受けた炎術師の一族である。

これはその神風一族の影に生き、呪われた島を守護する者たちの、表には決して 出ることのない。
裏の歴史の物語である。

アニメを見て今更ながら風の聖痕に再びハマってしまい、思い切って二次創作書いて見ました。

どこまで書けるか、わかりませんが頑張っていこうと、思っておりますので、奇特な方は応援して頂けると嬉しいです。

とりあえずクロスも考えており

シャドウライト

風使いの2つをクロスさせたいと、思っております

プロローグ（前書き）

とりあえずプロローグです。

プロローグ

邪龍島

(じゃりゆうじま)

東京近海に密かに存在する 孤島の島である。

その存在は一般人は知らず知ってるのは、政府の限られた者か古の頃より退魔を生業とする者たちぐらいである。

その人々から秘された島を管理し所有する者たちいや一族がいる。

古の頃からその島の管理を託された者たちを 神風 (かんなぎ) 一族という。

実はこの島は神風一族の偉大なる初代が とてつもない力を持つ邪龍と戦った島なのだ。

だが既にこの古の戦いの記録は殆ど残っておらず、ただこの邪龍を神風の初代宗主がこの島に封印したといういい伝えが残っているだけである。

だがこれは、異常な事だった。

何故なら神風初代宗主と言えば。

歴史上でも数人しか 確認されていない
コントラクター
契約者であり、炎の精霊王から与えられた炎雷覇を使えば神殺しとて、可能と言われた程の超人だったからだ。

その超人が滅することが出来ず封印した いや封印するしか出来なかった邪龍。

一体どれほどの力を持つか、考えるだけで恐ろしい。

ゆえに神風一族は、最大の警戒態勢を取った。

まずこの島を神風一族以外立ち入れないようにした。

次に他の術師たちの力を借りて、（この頃まだ傲慢ではなかった）この島全体に結界を張り、外から見る事も許可のないものが、入る事も不可能にした。

次に一族の腕利きたちを この島に永住させ封印の管理と封印された邪龍から漏れる、妖気に群がって力が増幅した妖魔たちや悪霊の駆除または封印

邪龍の生き残った眷族たちの始末などが 主にこの島に派遣された者たちの役目だ。

神風はそれを2つの分家に当たらせた。

初代宗主の弟を婿に迎えた。

火我家 （ひがけ）

初代宗主の妹を嫁に迎えた

火野家 （ひのけ）

二家とも当時数ある神風分家の中でも、一、二を争う名家で 宗家の信頼もあつかった。

それゆえ邪龍島の守護と管理を任された。

後に同じ分家である 燈野家 （とうのけ）も守護を宗家より任じられ、この三家を筆頭に幾つかの分家がその下に付き、三百年前に風牙衆を配下に加えた後は一部の風牙衆も島に派遣され今に至る。

物語はその呪われた島の一人の少年から 始まる。

少年の名は

火我業火（ごうか）十四歳

島の守護を統括する 神凧三分家の一角

火我家の三男（実質は次男）である。

プロローグ（後書き）

いかがだったでしょうか。

説明ばかりになってしまいました。

本格的な話しには、次話からの投稿で、入っていきたいと思います。

現在とあるの二次創作も同時進行で行っているので、執筆が遅くなると思いますが御了承下さい。

（って期待してる、人なんていないか。失礼しました？）

第一話 業火の初陣と思わぬ来客 (その1) (前書き)

今晩は短いですが、投稿します。

二つの作品同時進行中なので、ご了承ください

第一話 業火の初陣と思わぬ来客（その1）

「はあ、はあ」

少年は肩で息をしている。

厳しい鍛錬を今終えたばかりだからだ。

ここは神風一族が邪竜島（やどりま）と呼ばれる、世間からは存在すら知られていない

孤島だ。

少年が今いるのは、その邪竜島内にある 火我家邸内の外れにある鍛錬所である。

少年の名は火我業火（かがいりや）

現在十四歳で火我家の三男である。ただ次男が幼い頃に養子にいつているので、実質は次男である。

身長175の立派な体格に、成人男性には及ばないが鍛えた筋肉があり、腹筋は割れている。

顔を美形と言って差し支えない程整っており、島育ちのため肌は日焼けして、黒く焼けている。とても健康的な少年だ。

少年はこの鍛錬所で一人鍛錬に励んでいる。

この訓練所は火我家邸内にある、三つある鍛錬所の中で最も火我家邸宅に遠い外れた場所に位置する。そのため不便だが、少年業火に取っては、他の邪魔が入らず、集中して鍛錬出きるので、気に入

ってよく使う。

他の鍛錬所だと、やる気のないおざなりな修行をする者や、力を誇示して、弱者をいたぶったりする事があり、修行の妨げになるからである。

十四歳の少年が何故こんな修行をせねばならないのか？

それには勿論理由がある。

それは少年が代々続く退魔師の一族の者だからだ。

業火少年は千年という長い歴史を持つ、精霊魔術の炎術を行使する名門神風一族の分家の一つ火我家の生まれだ。

この火我家は、同じ分家である火野と燈野と共に、邪竜島と呼ばれる島に代々永住し、この島内にある魔を祓っている。

神風は宗家は東京にあるが、地方にも分家が配置されている。ただこれらの分家は交代制であり、永住という訳ではない。火我家や他の二家が永住しているのは、この島、邪竜島が特殊な存在だからである。

この島は神風の初代が凶悪な邪竜を封印した島なのだ。

そのため万が一封印が解けたりしたりしないように、その見張りとして、火我家と火野家が初代より、直々に頼まれ、以来千年長きに渡って

守護を続けて今に至る。

千年の歴史の中で、封印は解けた事はないが、封印からわずかに漏れ出す妖気ですら周りの妖異や妖魔の力を、増大させるのでその退魔を行わなければならない。

島にいる術師の子供達はだいたい12歳ぐらいで、初めての退魔活動を行う。

人によつては、もっとはやい、七八歳ですますものもいる。

退魔活動は命の危険があるので、鍛錬していると言っわけである。

ただ神風一族の血筋の者には、代々強力な耐火の加護と浄化の炎の力が生まれつきある。

これは他の普通の術師が十数年の長きに渡って厳しい修行をして得られるものであり、それを生まれつき得ているため、才能にアグラをかき、最低限の修行をしたら、後はあまり修行をしないと云うものが結構多い、無論そうでないものも当然いるしかしそれは、少数派である。

業火少年もその一人である。

「今日の午前中の鍛錬も終わったし、飯にするか…うん誰だ！」

鍛錬後気を抜いていた業火は、僅かな気配に気づき地面の石を気配目掛けて投げる。

ヒュンと石は空を切り、気配の方に飛んでいくが、気配の正体である人間がその石を片手で掴んで止めてしまう。

「危ないなあ、声もかけず黙って見ていたのは悪かったが、少し過激すぎないか？」

石を受け止めた、人間が、業火の前に出てくる。

身長１７５ある業火よりもまだでかい、１８５はあるだろう。

眼鏡をかけている、若い男である

インテリぽく見えるが、よく見れば無駄な筋肉を削ぎ落とした鍛えられた、体をしている。

この青年の名は火我聖^{ひがきら}

火我家次期当主であり、業火の兄である。

「聖兄さん、人の修行を邪魔するなんて、どういっつもりだよ」

「悪い、悪い。」

用があるから呼びに来たんだが、あまり熱心にやっているから邪魔しないようにと気配消していたんだが、鍛錬終わったから声かけようとしたんだが、びっくりさせちまったな
すまん」

と兄が拜んで謝る。

業火も別に修行の邪魔を直接されたわけではないので、許す事にする。

「今度から気をつけてくれたら、いいよ。
それで用って」

「ああ、父さんがお前の事を呼んでるんだ。
何でも初陣の事らしい」

と聖は言う。

「初陣の事？」

まさかまた延期するつもりなんじゃ」

と業火は苦い顔をする。

「さあなとりあえず、呼んできてくれ言われたただけだから、家にもどるぞ」

そう言った後、兄は 後ろも見ずにさっさと鍛錬所を後にした
一休話して何だろうと業火は思ったが、去っていく兄の後を慌てて追うのだった。

第一話 業火の初陣と思わぬ来客 (その1) (後書き)

いかがだったでしょうか。

短くなりますが、毎週更新を心がけたいと思います。

最後まで読んで頂きありがとうございました。？

業火の炎 一話 (業火の初陣と思わぬ来客 その2)

「父上。業火です。
宜しいですか？」

二時間後

食事をおえた業火は父の部屋の前に来ていた。
いきなり入室せず、襖に手をかけたまま、中にいる父に声をかける。

ほどなく父から、

「入れ」

と返事が返ってくる

「失礼します」

業火はそう言った後 父の部屋に入った。

「そこに座れ」

と言って座布団を指差す。

「はっ、ありがとうございます」

業火はそう言った後 父の指差した座布団に正座で座る。

普段から、瞑想を日課とする業火にとって正座は苦にならない。

背をぴんつと伸ばして、完璧な正座をする。

業火は座布団に正座した後父とその周りを見る。

父の部屋は父だけでなく、先客たちがいた。

業火の正面に父である火我家当主火我剛主（じつこう）がいる。

現在五十五歳寡黙な性格で、炎術には優れているが、苛烈な性格と身内に対しても厳しいので、顔には出さないが、嫌っている者も多い。

ただこの年になっても自己の鍛練を怠らず、退魔活動も先頭になつてこなすため 彼を尊敬する、若い術者達も少なからずいる

また人を教えるのも、上手く厳しすぎてねを上げる者もいるが、耐え抜いた者たちは、修行前と比較にならないほど腕を上げている。

退魔師として、指導者としては一流

反対に父として当主としては二流、下手したら三流、それが火我剛主と言う男である。

その剛主の右側に一人の男いや老人がいる。

火我家前当主

みちまさ
火我道正である。

業火の祖父であり、業火の数少ない味方でもある。

業火もこの温厚で、優しい祖父を慕っている。

その祖父は今年八十歳になる。

既に隠居して数十年が経つが、今なおその温厚な人柄に慕う者が多く、呼ばれて 火我 火野 燈野の三家の者たちで行われる合同会議にも参加する事がある。

父剛主とは違い、身長１６０の矮躯である。

その祖父が、皺を緩めながら、業火に優しい声で話しかける

「業火よ。わざわざすまんの、まあ楽にして聞くがよい。
そなたにとっては吉報じゃ」

「吉報でございますか？それは一体私の初陣の事だと、さっしはつ
いておりますが吉報とは？
お爺様それは一体どういう事ですか？」

業火は祖父の言葉の意味がわからず、聞き返す。

すると祖父は

「それは当主殿より 聞くがよからう」

そう言つて業火の質問に答える。

業火はわかりました と言つた後父の方に向き直る。

「それではお聞きします。父上、私の初陣に吉報とはどういう事でしょうか？」

と改めて業火は祖父に言われた通り、父に聞く。

「うむ。それはだな……要介すまんが、お前が説明してくれ」

父剛主は口下手な為必要最小限の事しか言わない。

自分が言つ必要がないときや、上手く言えない時は良く代わりに喋らせる。

その役を主に押し付けられるのが、剛主の妻 美代子みよこと剛主の弟で、業火の叔父である、火我よつぎ要介である 父の一番下の弟である要介は現在三十九歳である。

既に結婚して子供が三人いるが、結婚前から女好きであり、結婚後も浮気三昧

どごその女性をレイプして、妊娠させた 堕児みどりさせたと業火の耳に

入ったのは一度や二度ではない。また酒に酔っては暴力や炎術を行使するため危険極まりない。

自分より強い者には媚び、弱い者には強く出る。

わがままで強欲の好色家、業火は心の底からこの叔父を嫌っていた。

なお業火は

この叔父と己が母と 出戻りの姉も嫌っている。

父剛主については、嫌いでもないが、好きでもないと言ったところだ。

「では兄上に代わって、俺が説明する

業火よく聞くように」

「わかりました」

頭ごなしに偉そうに言ってくる、叔父の言葉を怒りと嫌悪の感情を強力な自制心で抑えつけて、外にその感情を出さず、業火は聞き漏らさないように、叔父の話に集中する。

「呼んだのはそなたの初陣についてじゃ 少し遅くなったが、そなたの初陣を一週間後に行う」

「はっありがたき幸せ」

業火はそう言って頭を下げる。

（いよいよか）

業火は叔父の周りくどい話を聞きながら、初陣に思いをはせた。

初陣とは神凧一族の子供が退魔師としての仕事を行う事である。

分家の子供で十歳から12歳のうちに行い。

宗家の子供なら

10歳未満で行う。 なお神凧家の歴史では最年少初陣記録は 五歳である。

初陣は初陣をする子供に大人の腕利きのベテラン炎術師がつき、その炎術師のサポートのもと、子供が標的を討つ。

やがて慣れてくれば、子供たちでチームを組み、その後単独任務で退魔を行う事になる。

火我家は優秀な術者を代々輩出しており その初陣年齢の平均は大
体

8歳から12歳までである。

現に業火の二人の兄は、

上の聖は十歳で、下の他家に養子に行った次男は7歳で済ませている。

二人とも単独行動による退魔活動を認められて何年かたつ、 優秀な炎術師たちだ。

しかしこの二人の兄に業火は決して劣ってはいない。
彼の初陣が遅れたのには、ちゃんとした 訳がある。

それは業火が、12歳から十三歳の一年間炎が使えなくなったからだ。その後それでも、修行を続けた業火は、十三歳になった誕生日に炎を取り戻した。しかしブランクが、あるとの理由で、剛主はさらに一年間修行のやり直しを命じた。

一年間の猛修行のすえ浄化の炎だけ出すという高度技術を取り戻した業火を見て、剛主はやっと初陣の許可を出した。

それが今から二週間前の事だった。
で今に至る。

業火が今までの苦勞を思い出しながら、一応要介の話も聞いている。

「で業火そなたの、初陣には当主である兄上。
それと俺と俺の長女にお前の兄二人にその養父である日比野家の当主、神島家の当主とその長女が付く更にここからが、肝心だからよく聞いておけ」

そう言った叔父は一度ゴホンと咳をしてもったいつける。

早く言えと思うが、顔にもましてや、口にも出さず、次の言葉を待つ。

「吉報と言ったのはこの事じゃ、何と東京の宗家から宗家の子息神風燎^{よう}様が分家の四条家の後継ぎと四条家の術者一人と後燎様がお世話になっておる蓮華院家のご息女のかれん様の四名を小鳥遊^{たかなし}の術者

二人がこの島にお連れしてくるのじゃ。

何でも燎様は小鳥遊の術者の高い練度を見て、このように強くなれるならとこの島に修行に來たいと申されての。

それで名譽な事ゆえ、お受けしたのじゃ。

業火くれぐれも燎様は元より四条のお二方にも粗相があつてはならぬぞ」

「はっ！火我家の一員として、初陣立派に務めて見せます」

業火は口だけは、殊勝な事を言う。

小鳥遊家とは元は火我家に仕えていた風牙衆の一家だ。

今からふた月程前、宗主である神風重悟が、風牙衆再建を行いたいと言つて、そのいつかんとして、地方に配置されている風牙衆たちの一部を宗家に呼び戻した。

その時小鳥遊家は、当主の後継ぎでない二人の子供を宗家に送つた。どうやらこの二人と退魔仕事を行った神風燎が、二人の的確なサポートに助けられ二人の術者を誉めると、二人の術者は島での厳しい退魔仕事のおかげと言い

今回の宗家の子息による武者修行となつた

なお滞在期間は二週間との事だ。

（なるほど、それでこのような豪勢な布陣になつたと言うわけか）

神風燎の名前は業火も知っている。

宗家の子供で、幼少の頃病弱であつたが、炎雷霸継承者候補に選ばれた程の才能に溢れていたが、病氣の悪化により、意識不明の重態

となり、近頃やつと回復して退魔仕事を行っているらしい。

次期宗主の綾乃や

宗家の子である煉にも及ばないが、それでも黄金の炎を使えない他の宗家の者たちとは違い、宗家にある数少ない黄金の炎の使い手だ。また幼い頃から、病のため一族の者たちとの付き合いがあまりなく、炎術至上主義者ではなく、風牙衆や風術を下術と蔑まない、神凧家の中でも数少ない、好人物である。そのため宗主重悟の期待は強く、神凧の次代を担う者と言われている。

現在15歳の高校一年生である。

以上が業火の知っている情報である。

（これは大変な事になってきたな。

しかし面白い。

宗家の力をこの目で見られるのだからな）

業火は、突然の神凧宗家の来訪と己の初陣を思い武者震いするのだった。

業火の炎 一話 (業火の初陣と思わぬ来客 その2) (後書き)

おかしかったので、修正しました。
すみません

業火の炎第一話番外編（神風療の試練）（前書き）

今晚は？

昨日投稿するはずが 遅くなってしまいました。

予定通りにはなかなかないものです。

業火の炎第一話番外編（神風燎の試練）

業火が叔父より神風宗家の来訪を聞いていた同じ時
とこの神風宗家でも、似たような会話が行われていた。

会話をしているのは 三人

神風宗家 宗主

神風重悟

その従兄弟で神風家 最強の術者
神風厳馬

そして邪龍島来訪予定の若き神風宗家の術者
神風燎である。

ただし元から寡黙な性格である厳馬は何も言わず沈黙している
なので主に話すのは 宗主の重悟で、燎がそれに答える形で、 話
は進んでいく。

「そうかいよいよ 明後日には発つか」

「はい」

宗主からの問いかけに、燎は強い意志を声に宿して答える。

強くなりたい。

その思いだけが、彼を突き動かしていた。

神風燎は引け目を自身に感じていた。

その反動で力に執着する傾向にあった

彼の引け目とは継承の儀にある。

継承の儀それは神風宗家の次期宗主を決める儀式

宗家から選ばれた術者が力の限り戦い最後に残った者を次期宗主とする、神風の聖なる儀式である。彼、燎はその儀式に参加出来なかった

その時彼は病におかされていたからだ。それが彼の引け目である。

神風の大事な時にお役に立てなかっただから次こそは強くなって役に立ちたい

それが神風燎の切実な想いだった。

この邪龍島への修行もその一環である。彼は燃えていた。

何故なら彼には目標があるからだ。

やがみかずま
八神和麻

神風宗家の嫡流に生まれながら、炎術の才に恵まれなかった男、しかし彼は自身にある炎術以外の溢れる才能を磨き極め、そして風術コントラクターを極めて、風の精霊王と契約し契約者となったもの

和麻の次元の違う実力を伊豆の加倉島で見せられた燎は和麻のように強くもしくはできる限り近づきたいと思っていた。

その思いを胸に秘め、燎は宗主に己の思いをぶつける

「邪龍島で厳しい修行に励み必ず強くなって帰ってきます」

「うむ。決心は固いようだな。

だがくれぐれも体には気をつけるのだぞ。

あそこは何が起こるかわからんところだ。かく言うわしも若い頃一度だけ行ったことが、あるが手傷を負って帰ってきた。」

「宗主がですか？」

燎は信じられなかった。

しかし本人が言っているのだから、間違いではないだろう。

驚いている燎に、重悟は詳しく説明する

「燎よあの島に封印されている邪龍は物凄い力の持ち主でな。あの島全体を封印された邪龍の漏れた妖気が包んでいるのじゃ、その封印から漏れた僅かな妖気すら島にいる妖魔や妖異たちに凄い力を与えるのじゃ。

時には瀕死の状態から瞬時に再生してしまう程の力をな

その龍がどんな力を持っていたのか？

名前も伝承されておらぬのでわからぬ

だがわしと思うに

その邪龍は神や魔王に匹敵または近しい力を持っていたのだろう

ゆえにあの島では何が起こってもおかしくはないのだ。

ゆめゆめ油断してはならぬぞ。

島から無事に帰ってくる。

それが許可する 条件じゃよいな！」

重悟は最後をきつくいい念を押す

その重悟の言葉に、自分を親身になって心配してくれるのを燎は感じた。

「お約束します。」

宗主必ず無事に帰ってきます」

そう言つて燎は頭を下げた。

「うむ儂からは以上だ。」

厳馬そなたは何か言うことはあるか？」

重悟は最後にだんまりの従兄弟に話をふつた。

すると促された厳馬は

「はっ！では一言だけ」

とついにだんまりを止めて口を開いた。

「なんじゃ厳馬」

と重悟は許可を出す。

「まだ出発まで2日あります。」

燎と同行する術者全員と私の模擬戦の許可を頂きとうございます」

「なんじゃと！」

普段冷静な重悟も、 従兄弟の突然の申し出に驚いた。

「蔵馬何故じゃ？」

驚いた重悟は従兄弟の真意を問う。

「大した意味はありません。
ただ実力がみたいだけです」

と蔵馬が淡々と答える

「それで実力を見てどうする？」

「私の眼鏡にかなわぬ術者には、 出発を止めて頂きます
無論燎も例外では、 ありません」

蔵馬は燎の方を鋭い視線で見る

「メンバーは儂が決めたのだぞ。
儂の判断は頼りないと言うのかおぬしは」

と重悟が非難の目を従兄弟に向ける

「あなたが、ちゃんと実力を見極めたのなら、 私も文句は言いません。
ん。

しかし実際は違う
分家たちから言われてそれを通したにすぎません違いますか」

「痛いところをつくのう」

従兄弟に指摘され、重悟は顔をしかめる

それからしばらく黙りこんだ重悟は仕方なく妥協案を出した

「敵馬の言うこともいちりあるの。そついう訳で燎よ
おぬしはどうする？ おぬしが良いと言つなら、ワシは構わんが」

敵馬をないがしろに出来ない重悟は、燎に決めさせる事にした。

「私は…すみません宗主少し考えさせて下さい」

「わかった。敵馬少し待ってやってくれ」

「はっ」

重悟は了承し、敵馬にも同意させる。

五分ほど経つただろうか。

考え込んでいた、燎が巖馬の方を見て言う

「巖馬様、修行宜しくお願いします」

と言った後深々と頭を下げる。

巖馬は、手加減せぬぞ 今から三時間後に皆を連れて鍛錬場に来なさいと、早口で言った後、部屋を出て行った。

「すまんのう。燎

出発間近で忙しいというのに」

重悟は燎の方を見て 申し訳ない気持ちになる。

「いえ構いません。 巖馬様の危惧は当然です。

私はまだまだ神風宗家の炎術師を名乗るには未熟です。

しかしせっかくの機会を無にするつもりはありません。

巖馬様の修行を乗り越え、必ず邪龍島に行きます。

では支度や、他の者たちとの打ち合わせがありますので、これにて失礼いたします」

燎は宗主に頭を下げた後、部屋から出て行った。

後に残った宗主は

「強さに貪欲なのは よいが、強さだけにこだわられても、困るの
う。」

可愛い子には旅をさせよと言つが、難儀な事じゃ」

一人療つぶやの事を思い
呟つぶやいた

業火の炎第一話番外編（神風燎の試練）（後書き）

いかがだったでしょうか。

ちなみにわからない方もいると思うので 補足説明を

神風燎は原作には出てきませんが、風の聖痕RPGに出てくるキャラクターです。

気になる方はリプレイ見て下さい
古本屋で百円ぐらいで売ってます。

ではご意見 ご感想

など待ってます

ありがとうございます

業火の炎二話（激突 弟？兄 黄金の炎？黄金の炎）修正版（前書き）

少し修正しました

業火の炎二話（激突 弟？兄 黄金の炎？黄金の炎） 修正版

場所は変わって、邪竜島

島内にある火我家敷地内の鍛錬場の1つ で最も遠い外れにある鍛錬場

そのため、あまり修行に術者が訪れない その地で二人の男いや少年と青年が対峙していた。

時刻は午後3時

神風宗家で敵馬と燎たちの模擬戦が始まる一時間前だ。

対峙する男それは
この火我家の子息

三男、業火と長男で 次期当主である聖であつた。
無言で対峙する、二人だったが、兄である聖が、沈黙を破った。

「業火いいんだな？」

兄である聖が、確認するように弟に聞く

「ああ構わねえさつさとやってくれ、初陣まであと一週間、 時間

が惜しい」

業火はいつでも来いとにかくに、好戦的な笑みを浮かべながら言う

その弟の態度に、兄は呆れながら、ため息をこぼす

「全く、残り一週間と切羽詰まったこの時期に、もはやこの数十年間、若い頃の父上が行ったを最後に、誰もしていないこの荒行を行おうとは、死んでもしらんぞ」

兄は弟の無謀な行いを何とかやめさせようときつい口調で、言うが残念ながら、効果はない。

それどころか、人差し指をチヨイチヨイと動かし、さっさとやれと兄を促す。

「はあ……わかった もはや何も言わない。

止めても無駄なようだな。

いいだろう……ただしやるからには、徹底的にやらしてもらおう。

死んでも化けてでるなよ！」

と言い終わると同時に、凄まじい闘気が 聖の体から、ほとばしる。

「さすが聖兄。

そうでないと、修行にならないぜ」

兄を軽口でちやかすが、鬨気を纏い修羅と化した兄は、反応せず、両手の平に炎を生み出す。

黄金の炎ではないが、凄まじい威力を秘めた、灼熱の炎である。

「お喋りの時間は、終わりってわけか」

兄の炎を見た弟もそれに応えるように、気を高める。

そしてファイティングポーズをとる。

「はあああ！」

ブンッ

兄はそのファイティングポーズを合図としたのか、両手の平に生み出した炎を勢いよく弟めがけて投げつけた。

「危ねえ」

飛んでくる炎弾を、ヒョイと避けた業火は、片手に小さな炎弾を生み出した。

その数10を

「そらっお返しだ!」

と兄めがけて放つ。

ヒュン ヒュン
ヒュン

1つは直線、1つは グネグネしながら
様々な軌道を描きながら、飛んでいく炎弾。

だが

無数の自分に襲いかかる炎弾を、聖は冷静にただ凝視しながら

一言

「喝あああつつ!」

で全てかき消してしまった。

以前神風宗主重悟が 娘綾乃の炎を消したのと同じである
気合い一喝で、操る精霊を奪い取り、跡形もなく散らしたのだ。

さすがに重悟のように灼熱のプラズマを 跡形もなく消す事は 出

来ないが。弱い炎ならばこれくらいの事は出来る
業火の火力は決して弱くはないが、今はスピード重視の牽制の炎
なので、火力は弱かった、といっても誰にでも出来るわけではない
が。
神風でも上位の術者くらいだろう。

数ある神風分家の中でも間違いなくトップクラスの実力者
恐らく互角の戦いが出来るのは、分家では亡き大神雅人くらいだろ
う。

大神武哉と結城慎吾の二人でも1対1ではかなわないだろう。

その兄の見事な手並みに弟は感心する。

（さすが聖兄だな。 あれだけの数の炎弾見ても、動揺せず気合い
一喝とはしかも あれでもまだ本気じゃないもんな。
厄介だぜ、だが兄貴 本命はそれじゃないぜ）

炎の攻撃を無効にされたのに、弟にはまだ余裕があった。

「ん？これは！」

その理由はすぐにわかった。

聖が気合いでかき消した炎の中から無数の石が飛び出てきたからだ。

「礫か！」

飛んでくる石から身を守るため、聖は両手に気を纏いガードする。

（くっ！固い石だ

奴め気を流し込み強度を上げたな。

銃弾と変わらんと、この威力、気を纏っていないければ、腕が折れてたところだ）

予想外の攻撃を受けた聖は動揺する気持ちを抑え込み、冷静になって、急所には 当たらないように、 防御し続けるのだった。

「上手くいったぜ」

防御に釘付けになっている、聖を見て業火は微笑んだ。

実は業火は炎弾を放つ時いくつかの炎弾は石を包んでいたのだ。石には自分の気を込め硬度を上げてた

聖の気合いは凄いが あくまで精霊への干渉なので、石には関係な

い。

炎かき消しても、その中に隠れてる石は関係なく、聖に降り注ぐというわけである。

姑息だが、不意をつける効果的な作戦だ。

（卑怯と思うだろうな。

でも強力な耐火能力もつ神風一族相手に 真っ向炎で勝負しかけるほど、強くはないんでね…さてとどめといきますか）

業火は礫をひたすら防御している、聖に しかけるべく

炎を足下に集め、それをジェット噴射のように使って、超高速で聖、向かって飛んでいった。

「しのいだか」

やっと礫の攻撃を全て防御し終えた。

聖は安堵したが、慌てて弟を探す。

「業火はどこだ？

それにしても気を込めるとは念のいった事だ」

聖は利き腕である右手をチラッと見る

「折れてはいないが…しばらく痛みで使えんな。
だが、負けが決まった訳ではない
業火め次はどうする気だ？」

聖が業火を探そうとした時

ドーン！！と

とても大きな、爆音が轟いた。

「何だ今の音は？」

大きな音に慌てて耳をふさいだ聖は辺りを見まわす

するとまるでミサイルのように一直線に　こちらに飛んでくる人影。

人影は業火だった。

「なっ！」

聖は慌てて避けようとするが、速すぎて間に合わない。

何も出来ない間に、　業火は間合いにはいる。

両拳に炎を宿しながら

「俺の勝ちだ兄貴！」

業火は勝利を確信しながら、パンチを打ち込む。

だが必殺の一撃が、眼前に迫ってきているのに、聖は笑っていた。

次の瞬間、
ドンッ！

突然火柱が現れて、業火の腕を焼いた。

「ぐわあー！！！」

業火は激しい火傷の痛みに耐えきれず、声を上げて呻いた。

そこへ

ズン

と

聖のボディブローが決まる。

「がは！」

業火は耐えきれず、両膝が地面に付いて、膝立ちの態勢になって、

腹を抑える。

「畜生何がどうなってる、あの一瞬であんな火柱の召還をしたってのか？」

業火は九分九厘勝ってた試合がひっくり返た理由がわからなかった。

「小細工は何もお前だけの専売特許ではない。

近接戦を得意とする お前だから、必ず接近戦をしかけてくると思
い、最初の時点で伏せていたんだ」

聖は追撃を加えるべく、業火に向かって歩きながら、言った

「ぐっ 最初だと？」

「そうだ。最初だ」

「まさか…あの2つの炎弾を放つ時か？」

業火は思いついた答えを聖に言う

それに聖はちゃんと答える。

「そうだ。あの炎弾を作ると同時に、炎の精霊に願い、俺の周りの地中に潜んで貰っていたのだ。お前が接近戦をしかけるべく、間合いに入った瞬間に顕現出来るようにな。」

これ見よがしに野球の投手のようにでかい動作で、炎弾を投げたのもお前の注意を逸らすため。

気合いで炎をかき消したのも、無駄に範囲を広げて精霊を潜ませれば、気づかれるのを防ぐため。

動きまわらない不自然さを隠すためだ。まあ礫は計算外だったから、ひどい目にはあったがな。

業火さつきも言ったが、お前は頭を使い工夫し隙をつき小細工等を使い相手を攪乱する^{かくらん}。

一族の者たちの炎術至上主義による力押しの戦い方には相性はいい。

だがこういう戦い方は神風一族の者のほとんどが使わないが、お前以外全員というわけではない。

少ないが一族の中にも体術や、炎術以外の術の重要性を知る者もいる。小細工もな。

さてどうする？

まだやるのか」

聖は見下ろしながら 業火に言う。

「まだまだ！」

業火は炎をジェット噴射のように使い。空に高く飛び上がる。

「ふう…やはりとことんやらねば、気が済まんか」

空高く舞い上がった 業火を見ながら、使える左拳に炎を宿す。

「はあああ！」

その聖の気合いにまるで応えるように、炎は燃え上がり、輝きをまし黄金の色となる。

「やば！兄貴の奴本気だ」

空中に浮かぶ、業火は聖の左拳に宿る 炎が黄金の炎になるのをはつきりと見た。

（まずいな、あれとぶつかったらタダじゃすまねえぞ。
右腕は…駄目だ咄嗟に気で防御したのに 大火傷してやがる
精霊王の加護がないと受けるダメージが 段違いだ）

業火は聖の炎を見て
対抗策を練る

（どうする。向こうは片手しか使えない、受け流すか？

いや駄目だ、加護がない今の俺じゃかすっただけでも、焼死は確定だ。

かといって攻撃しながら、気で体を防御するのは無理だし　それにしても、兄貴の奴…組み手で黄金の炎何ぞ出しやがって。

あれは洒落にならねえぞ、まあ本人の意思で出してる訳じゃないから、どうしようもないが。

あの感じじゃ自分が　黄金の炎出してるのに気づいてないな

）

業火は地上にいる、　聖の左拳で燃え上がる黄金の炎を忌々しげに見た。

黄金の炎

それは神風一族が持つ【浄化の炎】の最高位

宗家の選ばれた至高の術師が使う神炎には及ばないが、あらゆる魔を滅殺する最高位の浄化の炎

傲慢な神風一族の中でも神炎に次いで畏敬と畏怖を持って、見られる炎

すで分家は黄金の炎を失って久しく、今や宗家しか持ち得ぬ　力である。

「策は思いつかねえな。ていうか小細工でどうにかなるものでもない」

業火は黄金の炎を見ていたが、やがて覚悟を決める。

そして今までとは比べ者にならないほどの炎を精霊に願い呼び出す。

「目には目を、歯には歯を、黄金の炎には黄金の炎ってな」

業火も聖と同じ分家では失われたはずの 黄金の炎をその両脚に纏う。

「片手しか使えないこの状態で拳と拳のぶつかり合いしたら 俺の負けは確定だからな。

これなら力負けしない行くぜ兄貴！

余力はない。

この一撃に全力を込める」

業火は地上にいる聖に宣言すると同時に 両脚に炎を灯しながら急降下するのだった。

ゴォー

急降下してくる、業火を見ながら、聖は
呟いた。

「黄金の炎か！

やはりお前の才能は 我らを上回っている ようだな。

だが、才能≠強さではない、他の分家の者たちは宗家の絶対的力に
諦めてしまっ たが、俺は違う。

炎だけが力ではない、炎が無理なら気が駄目なら武器で 武器
が駄目なら拳が 足が、それでも駄目なら歯でも頭突きでも 戦う
意思が折れぬ限りいくらでも戦う手段はあるのだ、

よかろうお前が全力ならば、俺も全力で 応えるのみ

この黄金の炎は、我が命の輝き、砕けるものなら砕いてみるがいい
！！」

既に両者とも修行であることを忘れ、強い者と戦える、喜びに震え
力を惜しみなく出す。

その結果、どちらかあるいは両方死ぬ事になっても関係ないのだ。

元々、戦いが好きな二人である。

また聖はその強さゆえに、互角に戦える者が周りになく、業火は一
時的に炎術を使えない時期があったため、仲間外れにされたゆえに
競う相手がなかった。

業火の何が何でも勝とうという姿勢が、 普段聖が抑えている 好
戦的な心を引き出したのだ。

ゆえに二人は止まらない。
ただどっちが強いか 決める。
そのためだけに、持てる力を全て注ぎ込む。

「どうしよう?」

二人の兄弟がまさに全力でぶつからんと していた時
それを見ている一人の少女が困り果てていた。

年は高校生ぐらいの 清楚というイメージがぴったりの

彼女の名は

かざまつりしずな
風祭静和

火我家に仕える、風牙衆が一家、風祭家の次女である。

実は彼女は二人の試合が始まった時から 風術で気配を消しずっと
見ていた。

理由は彼女が今回の 火我業火の初陣に付き従う事になった風術師
だからである。

火我家の初陣は他の分家の者とは違う

他の分家は熟練した 術師に妖魔をある程度弱らしてから、初陣を受ける者に後を任せるが、火我家は そうはしない。継承の儀をもつて、宗主を決める宗家と同じく、強さこそを 第一とする火我家は 形だけの初陣などしない。

退魔すべき妖魔とそのいる場所を教えて 風牙衆を何人かつけて、初陣をする子供だけで退魔を行わせるのだ。

当然、初陣に失敗して亡くなった者もいるが、火我家はやり方を変えようとは、しなかった。

死ねばそれまで、それが火我家の考え方である。

そして今回業火の初陣に付き従う風牙衆に風祭家が選ばれた。

（でも我が風祭の術者は私とお姉ちゃんとお母さんの三人だけ。

お父さんは昔の退魔中に戦死したし、お爺ちゃんは年老いて任務にとてもついていけない。お父さんは一人息子だから、兄弟はいないだからといって、火我家から与えられた大事な役目全うしない訳にはいかない。

お母さんは私は出なくていいと言ったけど、お姉ちゃんとお母さんの二人だけじゃとても無理だよ

それに噂じゃ東京の宗家のご子息の方も来るっていうのに、もしそんなところで、初陣失敗うつん業火様に怪我一つ負わせても駄目どんなお咎めを受ける事になるか）

そう思った彼女は、 母を説得して強引に 初陣に加わる許可を得た。

片目を失った娘を、 案ずる母を説き伏せて。
まあ家のためだけが理由ではないが

静和は隻眼である、二年前14才の時
火我家の術者より交際してくれと言われたのを拒否したら、犯され片目を抉られたのだ。

犯人曰わく

奴隷の分際で逆らうんじゃねえ！

顔を焼かれないだけ ありがたく思えである。

幸いなのかどうか知らないが、それで飽きたのか、それ以来はちょっかいは出されていない。

姉は火我家当主に直談判すると言ったが、母と祖父と彼女の三人でなだめて我慢して貰った。

そんな事しようとしたら、当主に直談判するまえに一家皆殺しにされてしまう事を三人は知っていたからだ。

彼ら神風一族の炎術師たちは、私たちを人間とは思っていない。

害虫駆除宜しく、何の罪悪感を持たずに 殺すのだ。

後日、火我家から術者がやってきて、金と 目は退魔の戦闘時に事故で失ったと言う事にしろと納得させられた。それから静和は退魔の仕事は半ば引退した でもどうしても、人手がない時などは、手伝った。

神風一族の傲慢な性の哀れな犠牲者の一人が静和なのだ。

静和は地上で迎え撃とうと黄金の炎を纏う聖を見、次に空中から聖めがけて落下してくる業火を見た

「以前偶然ご一緒させてもらった時は、黄金の炎を使うほどの凄い術者だったけど……その後暴走事故を起こされて力を失なってしまう……最近取り戻したと聞いてはいたけど……ここまで力を取り戻されていたとは、でも良かったわこれなら、盾にされたり逃げるために、囷に使われる事もないわ。まああの優しい業火様がそんな事するわけないと思うけど

でも……どうしよう？

私が飛び込んでも、消し炭になるだけだし、かと言って誰か呼びに行ってる間に終わっちゃうだろうし」

そう静和が悩んでいるうちに二人の距離はどんどん縮んでいく。

「駄目やっぱりほっとけない。

業火様も聖様も、お止めしないと、このままじゃ、両方死ぬ」

いてもたっても、いられなくなった静和は無謀を承知で聖の元に駆けつけていった

二人を止めるために

業火の炎第二話（激突弟？兄 風の乱入と業火の秘密）（前書き）

少し修正しました

業火の炎第二話（激突弟？兄 風の乱入と業火の秘密）

一人の少女が決死の覚悟を決めていた時

空中の業火は、聖が待ち構える地上まで 後数メートルの高さにいた。

両脚に黄金の炎を纏っている。

一方地上にて迎え撃つ聖の方は微動だにせず、腰だめに構えて左拳を握り込んでいる。

その左拳には業火と同じく黄金の炎を宿している。

（正面から拳だけで 俺の蹴りを迎え撃つつもりかよ。
面白い！その腕ごとぶっ飛ばしてやる）

業火が心の中で思うと同時に業火は聖の間合いに入った。

次の瞬間こしだめに構えて微動だにしなかった。

聖が動く。

ドン！

凄まじい踏み込みを しながら、

「うおおお！！！」

左拳で雄叫び上げながら、アッパーカットを放つ。

聖、渾身のアッパーカットは、業火の両脚とぶつかり合うと辺りに眩い閃光を撒き散らした。

「眩しい目が」

聖と業火を止めようと、駆けてきた静和 突然の眩い閃光に、目を眩ませられ、立ち止まり、目をつぶって光から目を守っていた。

（遅かったわ。 お二人とも無事だといいいのですが）

ようやく光が収まりかけ、何とか目を開けられるようになった、静和が目を開けると

「業火様！」

ぶつかり合いに負けた業火が吹っ飛んでいくのだった。

そのまま業火は、空から落下し、地面に叩きつけられる。

「ぐはっ！」

地面に叩きつけられた業火は、しばらく転がった後止まった。

（痛くそ。何とかわずかに残ってた炎でブレーキかけて、威力を弱めたが…かなりのダメージだなこりゃ、まあ何もしてなかったら、死んでるか骨折してんだけどな。

それよりも何て馬鹿力なんだ。

足が痺れてやがる

大体、高速落下してくるドロップキックに片手アップで相殺どころか、うち勝つ何てでたらめもいいとこだぜ）

全力同士のぶつかり合いに負けた業火はそれでも諦めず、立ち上がる。

「足はガクガクで、立つのがやっとだが 折れちゃいないな。痺れはしばらく我慢していれば、ひくだろうが、その時間を 果たしてくれるかどうか？」

業火が足や身体の状態を確認し終わり、 前方を見ると

聖がゆつくりと力強い歩みで歩いてきていた、左拳には黄金の炎ではないが、炎を纏っている

その歩む姿は闘気に 満ち溢れ、さながら 羅刹のごとし

その姿を見るだけで 業火は凄まじい威圧感を感じ、数歩後ずさる。

（びびるなびびるんじゃねえ業火、吞まれたら勝つなんて不可能だぞ）

心の中で自分を鼓舞し何とか吞まれないようにする。

「まだ。戦う意思はあるようだな。

足をはじき飛ばされた程度では諦めぬか？それでこそ我が弟よ」

聖は歩きながら、業火の頑張りを誉める

「当たり前だ。まだまだこれからだ。この程度で勝ったつもりになつてんじゃねえ！」

業火は負けてたまるかと大声を張り上げる。

「強がりや、その強がりがいっつまで持つかな？

黄金の炎は使えぬが 俺にはまだこれだけの炎が使えるのだぞ お前は炎を使えまい」

聖は弟のダメージの 具合を観察して正確に指摘する

「へ、勝手に決めてんじゃねえよ」

と業火は虚勢をはるが

内心は

（ちくしょう。冷静さも兼ね備えてやがる。

確かにろくすっぽ炎は使えない。

無理して一発撃つのが精一杯か

無駄撃ちは出来ない 何とか接近戦に持ち込むしかない）

と業火は思うが、下手に近づいても、やられるだけなので、 しかける事が出来ない。
仕方なく近づいて来るのを待つ。

「動かない、いや動けないか。
相当、足にきているようだな。

それでもあえて、接近戦で挑むその意気やよし。
黄金の炎は出来ないが、今持てる全ての力にてお前を倒す」

そう言った後、拳を纏っているだけの炎が聖の体全身を覆う。

先ほどとは逆に、聖が向かい、業火が待ち受ける。

両者が拳の届く間合いに聖が入ろうとした時

「お二人ともおやめ下さい！」

少女の必至の叫びが 辺りに響いた。

その声に業火と聖の二人は声の聞こえた方を見る。

そこには一人の少女がいた。

年は恐らく業火より 1つ 2つ上だろう 美少女と言っても差し支えない器量だが、なぜか左目に眼帯という少女には似合わぬアイテムを、 付けている。

風祭静和である

彼女は吹っ飛ばされた業火とそれを追う 聖を追いかけてきたのだ。

静和は止めるように 二人に言った後、 風の精霊に呼びかけて 風術を使い、空を飛び業火の目の前に、素早く降り、次に両手を左右にひろげる。

「おやめ下さい。

聖様、こんなの修行じゃありません。
殺し合いです」

静和は、業火にとどめをさそうとする、聖を説得する。

業火は突然現れた、少女が何者かわからないので、とりあえず。

「お前誰だ？風術使うんだから、風牙衆なんだろうけど」

と聞いてみる。

「えっ？」

静和は突然質問されたので反応が遅れた。

「私は…」

と答えようとするより早く聖が静和の事を言う

「確か風牙衆の風祭家の次女静和だな。引退したはずの、風術師が一体何の用だ。」

それにここは神風一族の術者の鍛錬場
何ゆえここにいる…そうか、業火が目的か」

「俺が目的？一体どういう事だよ。
それに風祭って確か亡くなった当主の妻が当主をしている
あの風祭家か？」

聖の話聞いた業火が、静和に質問する。

業火の質問にやっと 静和が答える。

「はい。聖様の申される通りです
ご無礼と思いましたが、業火様の修行を 拝見させて頂きたく 気配を絶ち、潜んで最初から見させて頂きました」

（もちろんそれだけではありませんが、業火様、あの時より背が伸びて遅しくなれてますわ。三年前に一度会っただけなので、忘れられてるのは、仕方ないのでしょうが、でも悲しいです）静和は心の中で業火への思いを燃えあがらせるが決して外には出さない。

「何で俺の修行何か見たいんだ？」

業火は理由が解らず、首を傾げる。

「間抜けが」

そこに聖の厳しい、突っ込みがはいる

「何だよ間抜けはないだろ」

業火も間抜けと言われたので、文句を言うが聖は無視する

「少しは頭を使え、修行を見たい理由など、術者としての腕前を見たい以外に何がある」

と業火を睨みつけながら言う。

「あゝ確かにそうだな。それしかねえかで何で俺の腕前なんか見たいんだ？」

「簡単な事だ。彼女たち風祭家がお前の 初陣で退魔のりの 支援を行うからだ

お前の腕が未熟だったら、囷や盾にされかねんからな」

「なるほど、一緒に組む相手の力量ぐらい知っておきたいよな。」

それに俺の支援をしてくれるのが、風祭家とは知らなかったぜ」

「たわけ、そんな事で初陣を立派に果たせるか。
初陣で亡くなった先祖たちもいるのだぞ」

「わかってるよちょっと、うっかりしてただけじゃねえか」
と業火が聖のきつい説教に反論する

「そのうっかりが、致命傷につながるのだ。
戦場で死んでからでは遅いのだぞ」

「わかった、わかったそうデカイ声で怒鳴らねーでくれよ」

「わかったのなら、いい」

「ありがとうよ。」

なるほどつまり、俺と兄貴の組み手を見て俺の実力を計ろうとしてたのか

ですって見てたが、あまりにエスカレートしすぎたから、止めようとした。

これでいいのか？」

と業火は静和に確認をとる。

「はいそれで、間違いないです。

このままじゃどっちかが死んでしまうと思って」

と静和が小さな声で答える。

「そうか。

ありがとな助かったぜ」

と言つて業火は笑顔を浮かべて素直な気持ちで礼を言う。

「いえお役に立てて 何よりです…」

静和はそれだけを早口で言うと、 俯いてしまう。

その様子を見ていた 聖は

「ふっん」

と一言言つた後、体全身に纏っていた、 炎を散らした。

それに神風にしては珍しく精霊たちに礼を言うのを忘れない

それを見た業火が、聞く。

「兄貴どういづつもりだ？」

「どういづつもりもない。」

修行は終了だ。

女性の前で血を見せて怖がらせるのも、悪いしな。

それに美少女に鼻のした伸ばしてる、今のお前とでは修行にならん。

ついでに言つと、これ以上やったら、十中八九あいつに止められる」

そう言つて、首を振つてある方向を見る　釣られて業火もそつちを見ると

そこには一人の男が立っていた。

聖よりも高い身長190センチの長身に筋骨隆々の体に、スキンヘッドで腰に木刀を差している。

「劫兄」

そこに立つ男を業火はよく知っていた。

男の名は
ひびのうし
日比野劫獅

業火の兄で火我家次男でありながら、
日比野家に養子入りした兄。

木刀を差している、ところからわかるように、剣術に優れ、
徒手
空拳でも

抜群の腕を誇る。

そして神風にも重要な炎術の腕前は
聖をも凌駕する

その力は黄金の炎を 己の意思で自在に操れるほどだ。

炎術の実力だけなら 、火我一族最強である。

「なんで劫兄がここにいるんだよ」

業火は劫獅に向かって言うが、遠いため 聞こえないようだ。

そのため劫獅ではなく、また聖が答える。

「恐らく炎の精霊を感知したのだろう。 いくら感知能力の低い炎
術師でも、この 狭い島で黄金の炎などという強大な力を 出した
んだ。

それも二人分だ、気づかない方がおかしい。しばらくしたら、他の
者たちも、やってくるだろう。

騒ぎになる前に俺は さっさとここから、 離れる。

お前は好きなだけ、その子といちゃついてろ。

そうだ、彼女の家に行けばいい、そこで手当てをしてもらえ 家には本番で組む、 彼女の母親の風祭家の当主もその姉もいる。

連携の打ち合わせでもしてこい。

朝歸りにさえ、ならなければ、上手く誤魔化しといてやる。 では

風祭静和、弟を 頼んだぞ」

「イチヤイチヤって そんなじゃねえよ 朝歸り何かするか、

俺はまだ14だって

聖兄聞いてんのかよ？」

業火がひっしになって否定するが、言いたい事を言い終わった後、
聖は無視して 離れていった。

頼まれた静和は顔を真っ赤にして、俯いていた。

小声でわかりましたとぶつぶつ何回も言ってるが、それが聖に聞こえてはいないだろう。

業火を無視して早足で歩いてきた聖は、 劫獅が立っているところまで、歩いてきた。

そのまま横を通り抜けようと歩くが、
劫獅の真横で立ち止まり、前方を見たまま話す。

「すまん。わざわざ出張って貰って、その上無駄足を踏ませてしまった」
とすまなそうに言う

「別に構わん。兄者の本気など滅多に見れんからな
むしろ良いものを見させて貰って礼を言いたいくらいだ」

「そうか。そう言ってもらつと、気が楽になる」

そう言った後、聖は 進もうとするが、 劫獅が話しを再開する

「兄者忘れてた。
その怪我早く治してもらえ、何でも燈野の者たちが、外から腕の立つ符術師を呼んだらしい。
ありとあらゆる術に長け回復の術も非凡なものを持ってるそうだ。
情報通りなら、その 折れた腕初陣までには治るかもしれん」

「腕の立つ符術師だと？
何故燈野が外の者を呼ぶ」

「燈野の術者が、退魔中大怪我をおつたらしい、それで治癒術師を外から呼んだのだが、そのヘルプに噂の符術師が付いてきていてな。治癒術師が、手が空かないので、治癒術師の代わりに治癒を 行つたらその腕前が 治癒術師を上回っていたのだ。まだ若いと言つても 俺より1つ下の17歳なんだが、世界でも有数の符術師なんだそうだ」

と劫獅が聖に教える

「わかった。早速燈野家に行つてくるとしよう」

そう言ってから、歩き出す。

「兄貴！」

再び劫獅が聖を呼び止める。

今度は振り向いて、 聖の方を見ている

聖は歩みをとめ、同じく振り向いて、劫獅と顔を合わせる。

「何だ劫獅まだ何かあるのか？」

「兄貴が業火相手に、全力で挑んだのは ひょっとして、業火が宗家の血筋の者だからか？」

劫獅は聖に、火我家の秘密を明かし、聖に問う。

「劫獅！家の秘密をそれも絶対にかくさせねばならない秘密を迂闊に喋るな」

劫獅の迂闊な発言に 聖は烈火の如く怒る が劫獅は堪えない

「兄者よ話しがずれてるぜ。

俺が聞きたいのは、業火が宗家の血を受け継ぐから、挑んだのかって聞いてんだ。

宗家と戦って勝ちたいがあんたの目標だろ？」

劫獅は手を緩めず、 聖に追及する。

黙ってそれを聞いた 聖は、じっと劫獅を 見つめた後。
ため息を吐く

それからゆっくり話し出す

「お前の言うとおりだ劫獅。

宗家に炎で上回るのが無理なら、戦闘力で宗家を超える。

それが俺の長年の目標いや夢だ。

何としても叶えたい夢だ。

業火相手にやりすぎたのは、宗家の力を試したかったからだ 俺の鍛錬がどこまで、通用するのかをな 弟を実験台にしようなど、最低な兄だ軽蔑するか？」

「いや尊敬するね 純粹強さだけを求め己を鍛え上げ、非情の道をすすむ。

その飽くなき探求心は俺も見習わないとな。

でも業火よりもつと齒ごたえのあるのが、いるじゃないか？ 宗主お気に入り神風燎様がさ」

「何を馬鹿な、相手は宗家の子息だぞ」

「大丈夫さ組み手に 宗家も分家もない」

とニヤリと劫獅は笑う。

「お前と言う奴は、
…だがそれなら宗家に挑めるな。
面白い我が力燎様に
見せてやろう」

好戦的な笑みを浮かべ聖が言う。

「その意気だぜ兄貴、
そうと決まったら
さっさとその怪我、
治して貰ってきな」

「わかった。では
治して貰ってくるか
またな、劫獅」

「ああ。
お大事に兄貴」

兄弟は手を振って別れた。

劫獅と別れた後聖は
歩いて、符術師の下にむかっていた。

その胸中には

（神風燎か。果たして宗主期待の星にどこまで、通用するか
いや、通用ではない
勝たねばならない。
俺の目標は宗家超え
そして

あの男

神風宗家の術者

邪悪なる黄金の炎使い
かなぎしろう

神風焦

を殺す事なのだから

悲壮な思いに満ちていた。

業火の炎第三話（燈野家と桑島俊彦）（前書き）

指摘がありましたので修正しました

業火の炎第三話（燈野家と桑島俊彦）

「はぁ疲れた」

桑島俊彦（くわしまーとしひこ）はため息を吐くのだった。

ここは邪竜島内にある燈野家の屋敷にある庭である。

燈野家は火我　火野に並ぶ、邪竜島を管理する三分家の一つである。

その燈野家に呼ばれて桑島俊彦はこの邪竜島にやってきたのだ。

（正確には彼ではなく、彼の友人である治癒術士に援軍を頼まれたのだが）

桑島俊彦は符術士だが、治癒術も得意なのでたまに仕事を手伝っている

現在高校二年生で17歳である。

普段は影の薄いそれなりに、容姿の整った少年だが、実は七色の符

術士の異名を 持つ超一流の術士である。

近接戦闘は全く出来ないが、遠距離戦や 結界構築などに非凡な才能を発揮する

治癒術もそうである 友人の治癒術士には 及ばないが、間違いない超一流の技術を持っている。

（それにしても、

ずいぶん怪我人が、 多いな

一体どんな大物とやりあったんだ？）

現に俊彦の周りには、幾人かの重傷患者たちがいる。

ただ怪我人は多いが、死人はないとの報告なので、それだけが不幸中の幸いだろう。

（まあもう少しで、仕事も終わりだ。

報酬も悪くないし、 景色や自然もいっぱいあるところだから、
今度みくと一緒に来るのも悪くないよな）

俊彦はみくとの楽しいバカンスを夢想し にやけながら、仕事を終わらせた。

患者たちには奇異な目で見られたが、

手際に支障はなかったので皆黙って治療を受けた。

「ああ、終わった、終わった」

治療の仕事を終えた 俊彦は大きく伸びをした。

仕事の量的には、大したことはないが、 前日に退魔の仕事を 仲間たちと一緒に請け負っており、それを片付けたのが、午前四時それから、学校行ってから、島に直行である。
疲れるのも無理はない。

「ご苦労様、俊彦君 疲れただろう。
これでも飲んでくれ」

俊彦が伸びをして、 くつろいでいる所に、
彼の友人である、治療術士の日下部正道（くさかべ まさみち）がやってきた。

彼も治療を終えたらしい。

ちなみに俊彦が二人 うち一人は重傷で

日下部が三人、うち 二人重傷だった。

日下部は現在23歳の医大生である。

俊彦と同じ普通の一般の家の出身の術士で、 医術と治療術両方に才能を持っていたので、両方をやっている。

医術はまだ医大生で 勉強中だが、治療術は幼い頃から有名な術士

に鍛えられたので、たまに小遣い稼ぎに治癒術の治療の依頼を受けている

なにしろ稼ぎがいい 治癒術士は高度かつ 特殊な技術がいるので、全体の数が少ないまして、腕利きは 更に少ないので、引き手数多である。

正直、治癒術だけで やっていける稼ぎがあるが、治癒術も万能ではないので、医学も習っている
そんな凄腕治癒術士にして、エリート医大生が俊彦の友人である。
(まあ彼の友人には、すごいやつらが一杯いるが)

俊彦は友人の気遣いを素直に受ける

「すみません。
では遠慮なく」

俊彦はそう言って、 日下部が持ってきた、缶ジュースを取ってフタを開けてから 飲み出す

ジュースを飲んでいる俊彦の隣に、日下部が座る。

「すまなかったね。 一緒に行くはずの仲間が急に来れなくなっ

たせいで、代わりを急にやって貰って もちろん礼金は弾むよ。
大丈夫、さすがに神風一族だ払いがいいんだよ」

と日下部がニコニコしながら言う。

彼には治癒術で稼いだ金で開業医になるという夢があるので 報酬
が高いと資金集めがはかどるので、 機嫌がいい。

「神風ねえ。炎術師の世界最高峰とは、 聞してるが俺が見た術者
は大したことがなかったぜ。電君^{ひょう}と黎君^{れい}にも及ばない。

火野家の当主やその息子たちは、結構な力持ってたが、それでも鮮
花ちゃんには及ばないな

┐

俊彦は神風の質の低さに呆れながら言う

「まあそう言うなって。

ここにいるのは、神風一族の分家やそのまた分家の者たちだからな、
神風は宗家と分家の差が圧倒的 いや絶対的なんだ
まあそれは他の精霊魔術を使う大家は、みな大体そうだけど
な。いくら神風って

言っても、分家ともなると精霊王の加護が、どうしても宗家に比べ
て落ちるんだ

黒野宗家の人間たちと比べるのはかわいそうだぞ。

黒野は歴史は短いが高いいんだ。

お前がさっき引き合いに出した鮮花ちゃんなんか神炎使い、黒野だ

つたら聖炎って呼んでるんだっけ、いいか俊彦君。神炎使いは神風でも宗家の者の中でも真に選り抜かれた者だけになれる領域なんだ。

神風一千年の長き歴史の中でその領域に到達出来たのは、わずか12名しか認知されていない。

炎の精霊王から神器を与えられてる神風でも希少なんだ
黒野の百年で5人が 異常なんだ」

「なるほど。

じゃ鮮花ちゃんは結構すごいんだな」

俊彦は目下部の説明に納得する

「でも俊彦君。君だってすごいよ

僕は君以上の符術士を知らないからね

さて話しは変わるんだけど、実は帰りの船は明日の朝にならないと、

出ないんだ。そこで僕は燈野家に

泊めてもらうんだけど、君はどうする？

「

と目下部がそう聞いてきた

これに俊彦は驚く

「えっ！どういう事ですか？
聞いてないですよ」

「すまない。つい言い忘れてしまって
学校は今夏休みだろ？
何とかならないかい？
もう朝の出港でも、大丈夫って言ってしまったんだ」

と日下部はすまなさそうに、両手を合わせながら言う

（はあまたかよ。意外と自己中なんだよな）

たまにこういう事があるが、決して悪い人ではないので、俊彦は讓
歩する

「わかりました。
明日の朝に帰れば、いいんですね。
で、俺もその燈野家に泊めてもらったら いいんですか？」

「ああ頼むよ。

夜から大したことはないが、食事会有一些る時間は8時からだから、それまでは島の観光でもしてるといいよ

じゃあ僕はこれで

またよるの食事会でね」

そう言つて日下部は 俊彦から離れていった

それを見送つた俊彦は

「8時から食事会ね、 今4時だから日下部さんの言つとおり 観光でもするか

観光してお勧めスポットとかわかったら みくのやつも楽しめるしな。

少しはサービスとかねえとな

全く大体由希とべつたりしてるから、彼氏に見られないし、ここでいいとこ見せとかないと 彼氏の威厳が、まあここにいても仕方ないし、飯まで時間つぶすか」

俊彦は立ち上がり、 観光に出かけていった

ちなみにみくは俊彦の彼女であり、由希は幼なじみの親友である

同じ時間。

俊彦が燈野家を出た時、燈野家にやってきた者がいる。

火我聖である。

彼は日下部や俊彦たちがこちらで、治療をおこなっているのを知り、燈野家に治療を受けに来たのだ

聖は門の隣にあるインターホンを押す

しばらくしてから、声が聞こえてきた

「どちらさまでしょうか？」

落ち着いた感じの女性の声だ

「突然の訪問すまない。

私は火我聖という。修行中に怪我をしまして、こちらに腕のいい治癒術士がいると聞いてきたので、出来れば治療してもらえないか？」

と聖は事情を説明する

「火我？火我家の聖様ですか？
次期当主の」

インターホンごしの 女性の声がおおきく なる

かなり驚いたらしい

「ああ次期当主になれるかはまだ決まっていないうが、その火我聖だ」

聖は相手の女性の質問に答える

「失礼しました。

早速当主にかけあつてきます。

しばらくお待ちください」

女性は丁寧に言うと 一旦話をやめた

十分ほど聖が待ってたら、向こうから再び声が聞こえてきた

「お待たせしました

仕事が終わわり、休憩されてましたが、
大丈夫だそうです

どうぞお入り下さい」

と女性が言う

「了解したありがとう」

そう言って聖は燈野家の門をくぐった

業火の炎第三話番外編（回想 風の少女と炎の少年の出会い）（前書き）

今晚はちよつと脱線してしまいました

番外編です

業火の炎第三話番外編（回想 風の少女と炎の少年の出会い）

「業火様もうすぐ 我が家です」

と静和が隣にいる業火に言う

「そうか。 すまんなところで、急に行っているのか？
迷惑じゃないのか？」

聖が燈野家に着いた頃。

業火はというと、静和の案内でもうすぐ風祭家に着くところだった

ただし二人は腕を組ながら歩いている

業火は歩きにくいと思ってるのだが、静和が離そうとしないので仕方ない

（まあいいか。

痛みを和らげるために、ヒーリングもしてもらったし
俺に触れたいなら、好きなだけ触れたら いい）

業火はそう心の中で思いながら、先を急ぐのだった。

その後、修行を聖によって中断された業火は、兄の言葉に従い風祭家に行くことにした。

鍛錬場を離れる時に、静和が業火の傷をヒーリングで癒やしてくれたので、今は体の調子がいい。

拙い技と彼女は言ってるが、そんな事はなかった

『業火様だけ特別です』

そう彼女は言って癒してくれた

実は彼女はこの治癒術の能力を隠しているのだ。

理由はこき使われるからと自分の命を守る為である

先にも挙げたが、治癒術の使い手は少ないのだ。

だから外から高い金払って、術者を呼ぶのである。

もし彼女が治癒術を使えると知ったら、神凧一族は隻眼であろうが、お構いなしで退魔の最前線に連れて行くだろう。

そんな事になったら命がいくつあっても足りない。

ただでさえ、風牙衆は神風一族の術者より殉職者が多いのだ

隻眼となった娘の事を思い、彼女の母親は厄介事に巻き込まれないよう治療術の使用を禁止した。

これは徹底しており、同じ風牙衆の者に対しても隠すよう言われている。

ゆえに聖の治療は行わなかったのだ。

そんな母親の教えを忠実に守っていた彼女だが、業火だけは母の教えを破り、癒やした。

何故なら彼女にとって業火は特別だからである

（こうして直接接するのは、初めてお会いした時以来ですね）

静和は隣を歩く業火の横顔を、チラッと見ながら、初めて出会った時の事を、思い出した

業火と初めて会ったのは、静和が13歳、業火が11歳の時である。

当時静和は既に、退魔士として、働いていた。

彼女は風術に並々ならぬ才能を持っていた。

母も優秀で姉は風術だけでなく武術にも優れていた

彼女たち風祭家は他の火我家付きの風牙衆 風野家 風間家の術者たちと、ローテーションで火我家や その分家筋の日比野や日山家の炎術士たちの補佐についていた。

業火と静和が出会ったのは、そんな退魔仕事の最中である

早朝7時

静和は退魔仕事の準備をしていた

10歳の時から仕事を初めてはや三年
持って生まれた才能もあり彼女は13歳にして、一人で任務につける程になっていた

今日の退魔活動も

静和一人の補佐に

火我家の術者が三人で退魔にあたる。

「これで準備よしと」

静和は準備を終えると、朝食を取るため台所に向かった。

静和が台所についた時既に先客がいた

年は静和より2つ上の姉 風祭夕貴^{ゆつき}だ

いかにもスポーツが好きそうな活発そうな少女で健康美に溢れている

静和とはタイプの違う美少女だ

「おはようお姉ちゃん」

先にいた姉に、静和は挨拶する

「おはよう静。朝食は作つといたわよ
お母さんは、朝早くから例の会議よ」

夕貴はそう言いながら、食卓を指差す

食卓にはおにぎりが10個に出汁巻きと 味噌汁があった

「お姉ちゃん。

こんなに食べられないよ」

静和は苦笑いをしながら、夕貴に言う

（私はお姉ちゃんみたいな大食いじゃないのよ）

と心の中で思うが、 喧嘩になるので黙っておく

そんな大食いの姉が席に付くよう促す

「静ご飯が冷めるわ。早く食べましょう。大丈夫私は五個おにぎり食べるから、あんたは残った分食べたらいいのよ」

（だからそんなに食べられないって）

静和は、心で思った事は口にせず、急いで席に付いて、食事を始めるのだった

姉が豪快におにぎりを平らげていくのを見ながら、静和は食事を続けた

姉のように豪快に食べず、小さな口でちょびつとずつ食べている

そうやって食事を続けていると、先に食べ終わった姉が、お茶を飲みながら、話しかけてくる

「ところで静？ 今日の仕事大丈夫なの
確か火我の駄目叔父と組むんでしょ？」

姉の問いかけに静和は、食事を一旦止めてから答える。

「うん。」

後二人術者が火我家から来る予定」

「そう。で標的は？」

と夕貴が聞く

「情報によるとシイが五匹」

と静和が答える

「シイが五匹つて
結構やっかいじゃない。」

火我の馬鹿叔父で大丈夫なの？」

火我の馬鹿叔父とは 火我家当主、剛主じゆうしゅの弟要介の事である。
悪い噂が絶えない上に術者としても、大した力を持たないくせに、
火我家の名をかさにきてやりたい 放題の自己中野郎で 一族だけ
でなく、風牙衆も嫌っている
鼻つまみ者だが、少女たちにとっては、それだけではない。

彼女たちの父親を殺した張本人と言う、 因縁がある

彼女たちの父親、

風祭 勇司^{ゆうじ}静和が10歳の時に 退魔中の戦闘で亡くなった。

その退魔戦闘を行ったのが、要介である その戦闘は同じ分家で島を守る燈野家よりの救援要請による 出動だった。

標的は飛縁魔^{ひのえんま}が10体

飛縁魔は夜な夜な男の生き血をすすり、 吸血（吸精）鬼の妖怪である。

燈野家に恩を売るチャンスと思った要介は、風牙衆三名と自分と他二名腕利きと ともに救援に向かい これを滅ぼすのに成功したが、最後の一匹だけ親玉で手ごわく、要介は風牙衆三名に特攻を命じ、三人の風牙衆が戦っている間に、遠距離から仲間の術者と力を一つにした特大の炎弾を叩きつけた、風牙衆もろとも

結果参加した三名の風牙衆は

静和たちの父勇司死亡

残り二人中

一人は全身大火傷で 3 日後に死亡

もう一人は火傷のため両足切断となった

しかし燈野家の術者及び火我家術者の被害は軽傷者は出たものの、
重傷や死者は 出なかったため
むしろ少ない犠牲で 勝利したと賞賛された。

風牙衆としては、たまったものではないが、文句は言えなかった。

あれから三年、その因縁の相手と妹が仕事をするのだ、姉として気
にならないわけがない

「あんたもついてないわよね。

要介の馬鹿と一緒に仕事するはずだった 風間家の術者二名が 急
に神島家の援軍に 呼ばれたから、こんな事になって、私が代わり
に行つてあげたら良いんだけど、私も仕事入ってるし」

夕貴はすまなそうに言う。

なお夕貴の仕事はさっき言った神島家の援軍である

「大丈夫心配しないで、お姉ちゃん。

私だってこの仕事もう三年やってるんだよ、それなりに経験はつんでるわ」

静和は姉に心配をかけないように、元気よく自信満々に言う。

「まああんたの腕は わかってるけど、それにしても、最近妖魔や妖怪の出現が多いわね、神風の連中ちゃんと補強してんの？」

と夕貴が言うと、静和が慌ててその口を両手でふさぐ

「お姉ちゃん何言ってるの！
誰かに聞かれたらどうするの！」

姉の軽率な行動に、 静和は怒るが夕貴は、 静和の両手を口から外すと、まったく 悪くも思わず、話を続ける

「事実を言っただけじゃない。
これくらい言っただけで構わないでしょ！ 神風の前で言ってる訳じゃないんだから、こっちは数百年間 奴隷にされてんのよ。ちょっとは発散しないとストレスが溜まってしかたがないわ」

と姉が怒鳴る

その通りなので静和は何も返せない

そんなしょんぼりした、妹を見ていた夕貴は、慌てて謝る

「ごめん……あんたにあたってもしかたないわよね。

最近大人の術者たちが、物騒な事言ってるから、ついナーバスにな
っちゃって」

夕貴が胸の前でごめんと、両手の平を合わせて言う。

「いいよ。私だってこんな境遇に納得してるわけじゃないから。

それより物騒な事って反乱のこと？

確か風牙衆の長である兵衛様が計画してるって聞いたけど」

と夕貴に答える

「そうあんたも知ってたんだ。

今日も、密かにやってきた兵衛様の使者が 昨日に続いて朝から島の風牙衆の各当主を集めて会議を開いてるわ

母さんも当主だから

行ってるわ

」

「お母さん反乱に参加するつもりなのかなあ？」

静和が心配気な声で言う

風牙衆の長の要請である。加えて動機は十分ある

静和が心配するのも 当然だった。

しかし夕貴はそれ笑いとばす

「大丈夫、大丈夫母さんそんなに馬鹿じゃないから。

神炎使いが現在二人いる神風に私たちが束になったって勝てる訳ないじゃない

そりや今の扱いはひどいわよ。でもそうじゃない神風一族の者だっているわ。

お爺ちゃんが、知り合いに調べさしたところところ、宗主様がそれをなんとかしようとしてるんだって、まあ深く考えないでおきましよう。兵衛様も今すぐ反乱起こすつもりじゃないみたいだし、その内心変わりするわよ」

と夕貴が明るい声で言う

「ノー天気そんな感じがするが、それでも妹に心配させないように明るく振る舞っているのである。

「そうだね。このままがいいとは思わないけど、反乱よりはましだね」

静和が頷く

「そうそう。 そんな大人たちの謀略よりあんたは自分の仕事の心配しなさい

確かシィって牛を喰い殺すとかいう恐ろしい妖怪よね。

べつめい豪猪^{やまめひじ}って呼ばれて猪のような生き物で、頭から背にかけて、刺のような長い毛が生えてて、豪猪が怒るとその毛を矢のように射るって奴でしょう。

さらにこの島の邪竜の封印から漏れ出る 邪気を吸ってパワーアップしてるんでしょう。
手強いんじゃないの」

夕貴が心配気な声で言う

この島、邪竜島の妖は外に比べて強力である。

理由は夕貴が言ったとおり、邪竜の封印から漏れ出る邪気である、その邪気は妖怪 妖魔 悪霊を問わず、力を増幅させるのである

最初から牛を喰い殺す力を持つ妖怪が、 どれだけパワーアップしているか想像するも恐ろしい。

「大丈夫よお姉ちゃん。」

私逃げ足は早いから」

と夕貴に笑いながら言う。

「そうまあ気をつけてね。」

それとくれぐれも、ヒーリングの力は使っちゃだめよ。

こんな便利な力持ってるの知られたら、ぼろぼろになるまで
使
い潰されるわよ

「

夕貴が真剣な表情で言う。

「解ってる。お母さんの教えはちゃんと胸に刻んでいるから」

そう言いながら静和は胸に手を置く。

それを見た夕貴はため息を吐く

「わかったわ。

念のために言っただけ。

要介には注意するのよ」

そう言った後

夕貴はご馳走様と言って、食器を洗い場に持っていった。

それを見た静和は

食事を再開した

「遅いわね」

午前9時40分

静和は神凧の術者たちとの集合場所の、火我屋敷内の第二鍛錬所

で待っていた

集合時間は午前9時ジャストである。

既に待ち合わせ時間より四十分が過ぎていた。

（こんな事なら、

慌てなかったら良かった）

静和は夕貴と長話をしてしまったので、急いで食事を終え、家を出て来たのだ。

ここについたのは、午前8時50分である

静和はここについてから、立ったままずっと入り口の方を見ているが、人影は見えない。

静和ははあっとため息を吐いた

（もう帰ろっかな？）

午前10時30分未だ神風の術者は来なかった。

術者の携帯番号も知らない静和は待つしか出来なかった

無論屋敷を訪ねにいくなど論外である

見つかった時点で、半殺しにあう

ここに立ち入れたのも事前に許可を貰っているからで、普段は近づく事すら出来ない。

静和は既に、一時間三十分待たされていた

退魔仕事の前に力尽きそうになっていた 静和に風が音を運んできた

（この足音は人の足音だわ、やっと来たのね）

静和は崩れかけていた、姿勢を直立不動に正した。

間もなく、話ながら 三人の男たちがやってきた
うち二人が歩きながら話しており、三人 目は二人より後ろを歩いている。

神風の術者たちは、直立不動をしている 静和の前まで来ると立ち止まった

三人のうち二人は高校生ぐらいか、醜い容姿ではないが、軽薄な感じがする少年たちである。

二人はよくみると顔の形など雰囲気がよく似ていた。

火我要介の息子

長男 火我 哲志^{てっし}
と

次男 火我 幸太^{こうた}

である

長男の哲志は18歳の高校三年生

両耳にピアスをしている

次男の幸太は16歳の高校一年生

こっちは眼鏡をかけて、長髪をなびかせている

二人とも聖や劫獅には及ばないが、その炎術は父を超える腕前である。

だが腕前と反しそれを御する強い心は持ち合わせておらず、その性格は極めて傲慢である。

「おゝ感心 感心

俺たちより先についてるじゃねえか」

そつ言いながら、哲志がポンポンと頭を叩きながら言う。

「奴隷が御主人様より先につくのは当たり前前の事ですから、そこは誉めるとこじゃないですよ兄さん」

と幸太が言う

二人ともまるで虫けらでも見るような、見下した目で静和を見て
いる

年端もいかない女の子を一時半も待たせるとは、まさに女の敵である。

そんな傍若無人な振る舞いに耐えて、静和は笑みを浮かべ挨拶する

（我慢　我慢　）

「おはようございます　哲志様　幸太様

今日は宜しくお願いします」

静和はにっこり笑って頭を下げる

それを見ながら、哲志が笑いながら言う

「おお、宜しくな

せいぜい俺たちの足を引つ張らないようにしろよ」

と言いながら、ゲラゲラと笑う。

そんな哲志に嫌悪感を覚えるが、静和はさっきから気になっている事を聞く

「あのところで、要介様はいかなされたのですか？
予定では要介様を入れた三人だったのでは？」

静和は要介の事を聞いた。

だが哲志から返ってきた答えは意外なものだった。

「親父？親父は来ないぜ？」

急用だってよ。

だが心配するな、助っ人を連れてきたからよ」

そう言って、ある方向を指差す。

そこには、さっき二人の後ろをついてきていた少年がいた。

無口な少年のようで、黙って会話にも参加せずにこちらを見ている。

その無口な少年を哲志は手招きする

「業火こっちに来い」

哲志がそう言いながら手招きすると、業火と呼ばれた少年がこちらにやってきた

よく見るとあどけない感じがする、美少年だ。

幼い感じから恐らく、静和より年下だろう。

「業火今日、俺たちのサポートする、風牙衆のガキだ。

風牙衆、こっちは火我業火 名前ぐらいは知ってるだろう？

火我家当主である、剛主様の末っ子で、俺たちの従兄弟だ
今日連れてきたのは 俺たちの仕事ぶりを 見せて、勉強させてや
ろうと思っただけ。 なにしる二人の兄たちに比べてまだ、初陣もす
ましてない、落ちこぼれでな。
業火俺たちの水際立つ腕前みて、しっかり勉強して兄貴たちに追いつくんだぞ」

と業火の頭をくしゃくしゃにしながら言う。

業火と呼ばれた少年は無表情でそれを甘んじて受ける。

「まあそついうわけだ風牙衆、業火の護衛もしつかりやれよ」

そつ言った後、哲志は離れて行き、次に弟の幸太と話し出す。

（火我家当主のご子息の業火様）

静和は心の中で呻く

（名前は聞いた事や遠くで見た事はあるけど会うのは初めてだわ。

おつといけない、挨拶 挨拶

怒らしたら何されるかわかったもんじゃない）

静和は先ほど哲志たちにやったような、満面の笑みを浮かべて挨拶する

「初めまして業火様 お会い出来て光栄です。
私は風祭静和、風祭家の術者で微力ながら、精一杯お役目を果たさせて頂きます」

そしてお辞儀する。

しばらく静和が頭を下げたままでいると、頭上から声が降ってくる。

まだ声変わりしていない、幼く高い声だ

「顔を上げる

そんなにかしこまる事はない

俺は王族でも貴族でもないただの異能者だ

」

静和は業火に言われたので顔を上げて、業火を見る

顔を上げた静和を見た業火は、話したす

「自己紹介がまだだったな。

初めまして

火我業火だ。火我家の末っ子だ。

宜しく頼む風祭静和」

そう言つて業火は、右手を差し出し、握手を求めてきた。

しばらくぼろ然とそれを見ていた静和だったが、慌てて

「こちらこそ宜しくお願いします」と言つて業火の右手を両手で握つた。

二人が始めて出会つた瞬間だった。

業火の炎第三話番外編（回想 風の少女と炎の少年の出会い）（後書き）

いかがだったでしょうか？

次で過去編を終わり その次から本編に戻りたいと思ってます
あ
りがとうございました

業火の炎第三話番外編（回想風の少女と炎の少年その2）（前書き）

次話です。

少し長いです

業火の炎第三話番外編（回想風の少女と炎の少年その2）

午前11時

予定より はるかに遅れているが、今妖怪シィが出没する、島内のある山を静和たちは登っていた。

先頭を探查能力に長けた静和が、その後ろに哲志と幸太の兄弟が、一番後ろを、 業火が歩いている

哲志と幸太はべらべら喋りまくってるが、 業火は一人黙って後ろからついてきている。

（緊張感の欠片もないのね。 大丈夫なのかしらこの二人

それに比べて業火様は周囲を警戒しながら移動してる。

山登りで疲れてるだろうに、飲み物も極力飲まないで凄い）

静和は業火に感心していた。

（業火様は既に戦闘態勢に入っておられる。

妖怪が見えなくても警戒しているんだわ、飲み物をほとんど飲まないのも、両手をいつでも使えるようにあけとくため11歳なのはこの練度凄い)

静和は業火から視線を外した後

前方を見て更に警戒を強めるのだった。

あの後、業火と握手をし終わった静和は、出発するぞと言う

哲志の命令で、火我家を出た後、妖怪シイが出没する、とある山の麓まで歩いて行った

道中、哲志と幸太は べらべら喋りながら 歩いておりその会話の内容によるとどうやら、彼らの父火我要介は急用ではなく、浮気相手と会うために仕事をさぼった事がわかり、これを聞いた静和は、一瞬本気で帰りそうになったが、業火がいるので耐えた。

彼がいなかったら、間違いなく帰っていただろう。

(当主様からの仕事をバカ息子たちに任せて、女と会うなんてどう
いう神経してるのよ)

静和は口に出したいのを我慢して、心の中で悪態をついた。

(父親の浮気の手助けなんか、よくやれるわね)

その事を、恐る恐る 『奥様に悪いと思わないんですか？』

と聞いたら、哲志は下品な笑い声を上げながら

一言

「小遣いくれるから、いいんだよ」

だった。

さらに話しが進んでいくと、こういう事はよくやっており、退魔は初めてだが、修行をつけてやると言っでは、二人に小遣いを渡し、浮気相手のもとへなど、普通にあるらしい

母親もまさか息子連れで浮気などするわけないと思うので、

やりたい放題と言っただけである。

だが更に話しは続き、それによると、哲志が父親の愛人に手を出してしまい、今回の妖怪退治を罰として哲志一人押しつけられたそうだ。

それで、一人でやるのは面倒くさいので、弟の幸太を連れて来て、幸太が楽しようと一人黙々と修行する業火を猫の手よりはましだと、連れてきて、この面子となったのである

（もう嫌）

午後12時

静和は戦闘もしていないのに、疲労しきっていた。

これほど疲れる退魔活動は初めてだった

4人いるが、実質戦力は二人いや戦闘能力だけで言えば、一人だけである

4人は現在、昼食をとっている。

静和は自分で作ってきたお弁当を、業火は自前のおにぎりと漬け物と言う質素な食事をこの食事の間も片手ずつで、食べて決して両手は使わない。

一方馬鹿兄弟は

哲志はポリウム満点の弁当を軽く五人前をビールを飲みながら食べ
ており

幸太は酒こそ飲んでいないが、パンとお菓子を馬鹿食いしている。

完全にピクニック気分だった。

そんな二人を静和は呆れた様子で見、業火は無表情に眺めていた。

やがて食事が終わると4人は再び移動を開始した。

「はあゝ食った 食った、おい風牙衆、もうそろそろだろ、猪もど
きはまだか？」

哲志が爪楊枝で歯を掃除しながら聞いてくる

「もう少しで、シィが出没するポイントです」

静和が周囲を探查しながら言う

（変だわ、妖気を感じない。
どういう事なの？

動物たちは結構いる 見ただけで）

静和は周りを風の精霊に探らせるが、やはり妖気は感じない

「何だよ、もう結構山登りしてるのに、
まだ見つけれないのか
よ？

「使えねえ奴」

と言うと、次の瞬間 哲志は邪悪な笑みを浮かべ

「お仕置きだ」

と言いながら、野球ボールぐらいの大きさの弾を1つ、静和に向けて
飛ばしてきた

「えっ？」

山登りと周囲の警戒で、疲れてる静和は 反応が遅れる。

（防御が間に合わない）

静和が恐怖のため目を瞑ろうとした瞬間

火球は、何故か当たらず、静和の横を通り過ぎて、何か黒い物体にぶつかった。

ドンと大きな爆音が なり、その黒い物体を燃やす。

黒い物体の正体は
妖怪シイだった。

「そんな！こんなに近くまで来られたのに気づかないなんて」

静和が自分の探査に 引つかからずに、現れたシイを見て驚いてい
ると、いつの間にか、後方を歩いていた、業火が彼女の隣に来てい
た。

業火は鋭い目線で、 燃えるシイを見ていたが、ちらつと静和を見
た後、今度は哲志と幸太を見て言う

「あれを狙ったのなら、もう少し狙いをちゃんとしろ、危うく味方
に当たるところだったぞ、哲志」

業火は7歳も年上である従兄に、はつきり言う

もちろん業火は、シイではなく、静和を狙ったのがわかっているの
で、強烈な皮肉で言っている。

その強烈な皮肉を歯ぎしりしながら、哲志は聞いた

（くそガキが！
生意気な奴め

俺に説教しやがって
）

とはらわたが、煮えくりかえるほど、腹立たしいが今は我慢し、目
の前の敵に集中する

「幸太、やるぞ！」

「了解」

前方で苦しみもがいている、シィめがけて炎術を使うため 二人は精神を集中して炎を呼び出そうとする

一方業火は、静和に声をかけていた

「大丈夫か？、身内がとんだ迷惑をかけた怪我はないか」

素っ気ない言い方だが、すまなさそうな表情を見る限りたんに口下手なのだろう。

「大丈夫です。」

それより助けて頂いてありがとうございます。

業火様が狙いを逸らしてくれたのでしょっ

静和が業火にお辞儀して礼を述べる

静和も哲志が放った火球が、自分を狙った物であるのは当然わかっている。

それを業火が、その炎に干渉し炎の軌道をずらしたのだ

聖のように消しさる事は出来ないが、この少年の技量があの二人を凌駕しているのは一目瞭然だ。

（これほどの技前なのに何故初陣が許されないのでしょうか）

静和は不思議に思ったが、今はそんな事を考えてる場合ではない。

静和が、考えている時、業火が話しかけてくる

「気にするな。」

自分で攻撃しようと、思っていたから、手間が省けて助かった

それより今すぐ防御用の風の結界を張ってくれ、嫌だと思いがあの二人にも頼む」

「わかりました。

ところで私が探査していたのに気づかなかったのに、どうして業火様は気づいたのですか？」

静和は気になった事を聞く

業火はそれに意外な答えを返す

「気を落とすな、探知出来ていなかった 訳じゃない。
たんに妖怪と認識出来なかったただけだ

奴らは猪に似ている 妖気を消し、気配を猪に似せていたのだ

だから風で探知して も、動物としか思わなかったと言っわけだ」

「そんな器用な事が出来るんですか？
シイはそれほど賢い妖怪ではないはずです」

静和の疑問に対し

業火は 非常な現実を持ってその答えとする

「恐らく本来の妖怪シィならそんな事は 出来ないと思う
だが俺たちの前にいるシィは多分この島に封印されている、
邪竜から漏れる邪気を浴びた事で、強くなってるんだろう。
つま
りこの島が作り出したシィの突然変異だ。」

知能を得たとしても 、不思議じゃない」

業火の答えに静和は驚くが、この島の妖怪や妖魔は外の世界に比べ
て強いので、 多分業火の推測は間違っていないだろう

そんな会話をしながらも、静和は風の防御結界を4人全員に張る、
これで攻撃を受けそうになった場合、自動防御で風の精霊が攻撃を
ふさいでくれるのである。

静和はこの結界を

これのみの使用なら 数十時間展開出来るが

戦闘しながら、4人同時だと、持って一時間、悪ければ30分と言
ったところが 限界だ。

静和が自分に結界を張ったのを感じた
業火はその精度に素直に感心する

「見事だ。

助かる、ありがとう」

業火は静和に礼を言う。

「いえ、私の術など母に比べたらまだまだです」

と照れながら言う

その時

ドーンと轟音になり、炎に身悶えていたシイが1声鳴き声を上げた後ふっと消滅した。

「どうだ。猪もどき 神風の浄化の炎は
いい冥土の土産になっただろ」

哲志がガツポーズしながら言う。

幸太がその隣で、一仕事終えたとばかりに、ポケットからタバコを取り出し、くわえて、タバコの先に、炎術で火を灯し
一服する

業火と静和は黙ってそれを呆れながら、見ていたが、

突然

ブモウーと鼻息荒い 鳴き声が聞こえた

その鳴き声の数を、 風で調べた静和は、 恐怖を覚える、

「鳴き声の数は10 ? そんな……情報の倍の数こんな たった
4人でどうすれば」

静和は圧倒的な敵の戦力を知り愕然とする

その静和の声を聞いて、さっきまで勝利に酔っていた、バカ兄弟が

動揺する。

「10だと！情報より多いじゃないか？　嘘つけ」

哲志が恐怖のあまり、静和に食ってかかる

こんな緊急時嘘など　言うわけないのに、　動揺して冷静な判断が出来ないようだ。

そこに業火の冷静な声が、追いつちをかける

「それだけじゃない　挟まれるぞ」

業火の言葉どおり

間もなく、姿を現したシィたちは、業火たちの前方と後方から同時に現れて、4人を挟みうちにするのだった

漆黒の猪のような姿に、頭から背にかけて、刺のような長い毛が生えている。

業火たちの前方の茂みから四匹

業火たちの背後山道から、更に六匹

合計１０匹のシィたちである。

「戦力を分散されるのはまずい。

合流するぞ急げ！」

業火はそう言った後 静和の手を掴み、哲志たちと合流するため走り出す。

その哲志たちは、先ほどまでの威勢のよさは すっかりなりをひそめ、オロオロしている

シィたちは突進して こず、ゆっくりと雄叫びを上げながら、 距離を縮めてくる

「哲志兄さんどうするの？
これだけ数が多いと
どうしようもないよ」

幸太が怯えながら、兄にすがりつく。

「心配するな、こんな猪もどき、どうとでもしてやる」

そう言いながら、自分の手のひらに
人の顔程の大きさの火球を1つ作り出す

「くらえ！」

哲志は震えながらも 火球を先頭にいるシィめがけて投げつけた。

ゴォーと音をたてて、真っ直ぐ飛んでいく。

だがシィたちは、その火球を迎撃する

シィたちは自身の毛を逆立て、まるで矢のように飛ばす。

その数数十本のうち 10本ほどは火球と相殺し消え、残りは 雨

あられのように、 哲志たちに降り注ぐ

「「うわぁー」「」

二人同時に情けない悲鳴を上げる

その前に、慌てて合流した業火が立ち、 炎の壁を作り出し
防壁とする。

「ごおおー！」

巨大な長さ五メートルほどの壁が、降り注ぐ鉄毛に触れた端から、
焼き尽くす

数十本の鉄毛による 縦断爆撃を業火の炎の壁が完全に防いだ

「助かったのか？」

ようやく落ち着いた哲志が、前方で炎の壁を顕現させた業火を見て
呟いた。

「業火様大丈夫ですか？」

遅れて静和も合流する

それを見た業火は

「ふん！」

と気合いを上げると 炎の壁が形を変え、ドーム型となり、4人を包んだ。

ドームは狭く4人がぎゅうぎゅう詰めになってるが、高さは十分あり、立つても頭が天井にぶつからないですむ。

業火は一同を見渡して言う

「とりあえず、作戦を練るぐらいの時間はもつだろう。」

それでどうする？」

業火は一番年長者の 哲志に意見を聞く

それに哲志は、震えながら、ひしる

「何言ってるんだ？」

作戦もくそも、あの数にどう対抗するんだよ、さっさと逃げるんだ」

哲志の案に幸太も賛成する

「兄さんの言うとおりだ。」

俺たちじゃかなわない、助けを呼ぶんだ」

と必死になって言う が、業火はそれを一蹴する

「どうやってだ？」

逃げ回りながら、あの散弾銃みたいな、毛針を避けるのか？ それこそ不可能だ

後ろから数百本単位で飛ばされたら、全身刺されて、あの世行きだ」

冷静な意見だが、死の恐怖に怯える二人にとっては、神経を逆なでるだけに、しかない。

「はあ？ 正気かあ
じゃあどうするんだよ」

哲志が投げやりな感じで言う。

「さっきの攻防でわかった通り、遠距離は奴らの方が有利だ あれだけの弾幕を張られたら、こちらでは手数が足りない
ならば道は1つ

接近戦を仕掛け奴らを仕留める」

業火はきっぱりと断言した

その時

ズーンと振動が

炎のドームを揺らした

「どうやら奴らは、体当たりでもしてる ようだな」

業火がドームを見わたしながら、言う

どうやら業火の言った通りのようで、

ブモウーと言う雄叫びの後、重い足音が聞こえ、次に何かが ぶつかる音が響き、ドームが震動している

「うわぁ もうお終いだー」

幸太が頭を抱えて叫ぶ

「大丈夫です。」

まだ負けた訳じゃありません」

静和が怯える、幸太を励まそうとするが、幸太は

「うるせえ〜！

この役立たずが」

幸太はそう言いながら、静和を殴ろうとするが、背後から哲志が、幸太の腕を掴み、パンチをやめさせる」

「兄さん何を……」

哲志の行動が理解できず、幸太は言葉をつまらせた。

一方、弟の腕を掴んだ兄は、いやらしい笑みを浮かべている

「まあ待てよ、幸太

そんな奴殴つても、

何の解決にもならない。

それに殴るよりも、もっといい使い道がある」

「使い道？」

と幸太が聞き返してくる

「そうだ」

弟に向かって頷く。

その後、静和の方を見る

そして笑う

「お前囃になれ」

と静和を指差した

「何を言ってる?」

業火がそれを聞いて、驚き怒りを覚える

「何をつて風牙衆の小娘に囚になれって言ったただけだが」

哲志は悪びれる事なく言う。

更に話しを続ける

「お前が言っただじゃないか?

4人で逃げる事は出来ないって、なら誰か囚になってる間に他の者たちが、援軍をよぶ、これなら被害は最小限ですむ」

哲志は胸を張って、そう言う

幸太もそうだ、そうだと賛成する。

「本気で言ってるのか哲志?」

と業火が拳を震わしながら聞いてくる。

「何だどうかしたのか？」

俺らは精霊王様に祝福された選ばれし一族だぞ、俺たちを守るのに風牙衆みたいな、屑どもが役に立つなら、万々歳じゃねえか。どうせこそこそ嗅ぎ回るしか脳のない

奴らと俺たちじゃあ 命の重みが違……」

哲志はそれ以上喋れなかった。

いきなり飛び込んで来た、業火のボディブローが、腹にドンとめり込んでいたからだ。

「馬鹿でも、何かの役には立つと思って、我慢していたが、もういい。」

戦う気のない腰抜けはここで寝てろ、後で回収してやる」

業火は冷たい侮蔑の 目線で哲志を見ながら、拳をもっと奥に押し

込む

「業火……貴様……」

哲志が憎々しげな声を上げて、業火を睨む、

「文句があるなら、いつでも相手になってやる、闇討ちでも決闘でも何でもな

ただし命の保証は出来んがな」

そう言いながら、手刀を一発首筋に、ビシッと叩きこむ。

気を込めた一撃に耐えきれず哲志は、昏倒する

「哲志兄さん……
業火テメエ」

業火に兄を昏倒させられたのを見て、

炎呼び出して、攻撃しようとするが、

業火にひと睨みされると、金縛りにあったように動けなくなる。

まさに蛇に睨まれた蛙状態である

「俺も未熟だ。

感情を抑えられないとはな。

術者失格だ。

だがものには限度と　いうものがある、

貴重な戦力をつぶしたのは俺のミスだ

責任はとる、だが後悔はしていない。

戦う力のない女を犠牲にしておめおめ逃げ帰り、その事を何の恥とも思わんようなげす野郎を許せるほど、俺の忍耐力は高くない

風祭静和！

┐

業火に突然名前を呼ばれて、静和はあたふたする

「は、はっい何でしょうか業火様」

どもりながら、何とか返事をする。

「ここの炎の結界は 強化しておく。

すまんがここに残ってその馬鹿二人の面倒を見てやっといて くれ、
そんなのでも 親戚なんだね

死なれると困る」

「わかりました。
それで業火様は？」

静和は恐る恐る業火に聞く

「しれた事。

奴らを退治する

それが神風一族の義務いや女 子供を守るのは男の義務だ」

「そんな……危険すぎます。」

これだけの騒ぎです このままこの結界内にいれば、他の術者の方々が援軍に來られるはずですよ」

静和は止めようとするが、業火は止まってはくれない

「悪いがいつ来るかわかるならば、いざ知らず、いつ来るかわからないのに、籠城は無理だ

幸太わかってるな。お前は万が一の時は二人を連れて逃げるんだいいな」

幸太は自分より五歳年下の少年の命令を 壊れた人形のように 首を何度もカクカク振りながら頷く。

「業火様」

静和は叫ぶが、業火はチラッと静和を見て微笑んだ

「心配するな。
すぐ 終わらせる」

業火はそれだけ言うと、力強い歩みで歩くと自身の炎の結界内から外に出て行った。

業火が外に出ると、そこに10匹のシイがいた。

漆黒の猪に似た妖怪は、体当たりを順番に続けていたが、業火が見えると、体当たりをやめ扇状に 業火を囲んだ。

そして全てのシイたちが毛を逆立て、毛針の発車時刻態勢に入る。

業火の後ろには、彼が作った炎の結界があり、退くことは出来ない。

無論彼は退くつもりなどないが

「10匹全部いるな……好都合だ一撃だけですむ」

業火はそう言うのと、目を閉じ、集中し力を高めていく。

炎の精霊にひたすら 願い、己の精神を極限まですり減らし、炎の精霊を喚び出す。

業火に喚ばれた、膨大な炎の精霊たちが
、踊り具象化していないのに当たりに熱を撒き散らし、周りの温度を急激に上げていく

「はあああ!!」

業火の大声の気合いとともに、集まったその精霊たちは、黄金の三つの火柱となって、

噴き上がり、やがて 眩い輝きを放つ黄金の火竜に変形する

その数実に三つ

その火力は神風巖馬や神風重悟には及ばないものの、炎雷覇を持つ綾乃に匹敵する程のものだった

そんな眩い輝きを放つ絶対の力の化身たる己が生み出した火竜を息も絶え絶えで 業火は見る

「なにこのとてつもない精霊たちは……まさかこれを業火様が」

炎のドーム内で、二人の馬鹿兄弟のお守りをしていた静和は

突然あらわれた、とてつもない炎の精霊たちの数に驚いた

幸太は体育座りして 気絶している、兄を見ている。

「業火様」

静和は業火の無事を祈った。

今にも倒れそうだった

命を捨てた大規模召喚まではしてないが 限界を超えて、精霊を喚んでいる事に変わりはない

その圧倒的力を前にして、シイたちは攻撃出来ず、怯えだが、他のシイたちより一回り大きいシイが先頭に出てきて、一声吠えると、

怯えていたシイたちは、再び業火に毛針を放つ態勢に戻る

業火はそれを見ながら、三匹の黄金の火竜を天高く、上昇させる

「行くぞ火竜炎舞

三頭黄金火竜

乱れ黄竜！！」

業火の叫びとともに 空中に浮かび上がっていた三匹の黄金火竜たちが螺旋を描きながら、地上に急降下し、地面に爆炎を撒き散らし、業火が対象限定した炎のドーム型結界以外の全てを焼き尽くした

ブオォーン

断末魔の悲鳴を上げ灼熱の炎に焼かれて 消滅していく、

全てのシイが消滅したのを確認したのを見届けると、業火の意識は闇に誘われていくのだった。

業火の炎第三話番外編（回想風の少女と炎の少年その2）（後書き）

いかがだったでしょうか？

過去編もうちよつと続きます。

？

第三話番外編（回想2、炎の少年激怒 目覚める力その1）（前書き）

すみません。今回も過去編です？

第三話番外編（回想2、炎の少年激怒 目覚める力その1）

午後5時

業火が妖怪シイを全滅させてから、四時間が経過していた。
現在火我家邸内では

「まだ意識を取り戻さないのか？」

火我家次期当主の聖は、弟が昏睡している部屋に行き、弟の看病をしている使用人に容態を聞いた

すでに医者による治療は終わっており、命に別状はないとの事だが、
いまだ目を覚まさないままだ。

怪我はほとんどなく、昏睡の理由は無理に力を引きずり出した
事によるらしい

医者もいつ目を覚ますかはわからないとの事だ。

「申し訳ございません。よく眠っておられるとしか言えません」

使用人はすまなさそうに言う。

「そうか。ありがとうすまんが弟を頼むぞ」

聖は使用人に頭を下げて頼む

「お顔をおあげ下さい聖様。

言われるまでもないこと、業火様の事は私にお任せ下さい」

使用人との会話を終えた聖は、奥で眠っている業火をちらっと見てから、その場を離れていった。

火我家邸内

当主の私室

「そうか。

命に別状はなかったか。

だがいつ目覚めるかわからないのだな」

業火を見舞った聖は、あの後当主である父に呼ばれ、今父のい

る部屋で話している

この部屋は寝室でもあり、
無駄を嫌う当主はこの部屋一個しか使っていない

（先代当主は二部屋 あり
弟である要介にいたっては三部屋ある）

父の問いかけに聖は 先ほどの使用人との 会話を思い出しながら
答える

「医者もいつ目覚めるかはわからないとの事です。

あるいは目覚めない可能性もあるとも
言っていました」

「目覚めないなんて 事はないだろ？
あいつはそんなに脆くはない」

「！」

父に報告中に背後から突然声が聞こえてきたので、気になった聖は振り向いて背後を見る

そこには一人の男いや少年がいた

「劫獅お前……」

少年は聖がよく知っている、人物だった

名は日比野劫獅

年は15

頭を短く刈り上げ

身長185の、長身に鍛え上げた筋肉を纏っている

聖のすぐしたの弟で 幼い頃に、親戚の分家筋である日比野家に養子に入った

腹違いの彼の弟だった

その弟が急に背後に現れた

聖でなくとも、驚いてしまっただろう。

「よう兄者！業火の奴が倒れたんだって　それも退魔活動中だ　そうじゃねえか？」

「どういう事だ、あいつはまだ初陣も済ませてないだろうが」

と劫獅が不思議に思いながら聞く

「それは…」

と聖が答えようとすると

「劫獅ご苦労だったな、まあ座れ事情を話そう」珍しく普段無口な剛主が会話に割り込んでくる。

「わかった」

父に言われ劫獅は大人しく従がい、近くにある座布団に腰をおろした。

「では二人ともよく聞きなさい」

劫獅が座つたのを確認した剛主は二人の息子を交互に見た後

話しだした。

「はあ？まじかよそれ。

叔父貴のやつがそこまで馬鹿だとは 知らなかったぜ」

そう言った後、劫獅は使用人が持ってきてくれたアップルジュースを一口飲んだ

あの後剛主は二人に 今回の詳しい事情を 全て話した
その後の処分についても

その内容を聞いた劫獅が叔父の馬鹿さ加減に呆れたのは至極当然の結果であろう。

ただ劫獅とは違い、 聖はその程度ではすまなかった

「ところで父上叔父上の、処分がただか謹慎1ヶ月とはどういう事でしょう？　馬鹿息子たちならともかく」

聖は落ち着いた感じの口調で喋っているが、よく見ると拳を握りしめてぶるぶる振るわせている様子から怒りを抑えているのがわかる

「ふっ……処分に納得がいかないか？」

「当然です！」

聖は断言する

「では聞くが、どんな処分が妥当だ？」

剛主が、逆に問ってくる

「叔父要介親子は追放処分にすべきかと、無論炎術の力を封じ、場

合によっては 記憶の削除もやむを得ないと私は思います」

聖は父の質問に何の躊躇もせず、断罪が妥当だと答えた。

「手厳しいのう」

息子の容赦ない提案に、剛主は苦い顔になるが、聖は収まらずさらに話を続ける

「何故ですか？

本来なら刑務所にぶち込まれていても、文句は言えないほどの事を叔父はやってます。

私が調べた限り、強姦は10件以上、恐喝や詐欺や暴行にいたっては数え切れないほど、退魔中の事故と片づけられてますが、何人かの風牙衆も叔父によって殺され」

「もういい!!」

突然、今まで黙って聞いていた剛主が声を張り上げて、話を中断させる

「わかっている。

わしとて、あいつのやりたい放題には、参ってる。今回だって、私

は要介の一部の財産を没収、迷惑をかけた風牙衆に払うよう命じようとしたのだが、親父殿が 建て替えられた、それから何とか穏便にと懇願されたのだ
親父殿の願いをむげにすることはできぬ」

「すまんの」

剛主は聖に聞こえるかわからないぐらいの小声で 最後にそう言った

「お爺さまが……」

お爺さまの名が出ては、聖もこれ以上は 追求出来なかった。

お爺さまとは

先代当主道正の事である。

温厚な人柄と皆に分けへだてなく接する人格者である。（この分けへだてないには風牙衆も含まれている）

そんな皆に慕われている道正の唯一の欠点が馬鹿息子要介の溺愛である

「お爺さまが、出てきたんじゃ、どうしようもねえな兄貴」

劫獅が聖の怒りを宥めるように言う

「全くだ。しかしお爺さまのあの溺愛は 何とかならないのか 増長するばかりではないか」

「まあそう言うてやるな。」

親父殿は今も悔いておられるのよ、息子二人を死なせた事をな」

剛主が聖を宥めるよう言う

「親父殿にはわしと要介以外に、二人の息子がいた
それと長女も、だが 二人は死んだ。鍛錬中の絶火の行でな^{ぜっかのきょう}」

剛主は昔の事を、思い出しながら、語りだす。

「弟たちは自分たちの意志で絶火の行をおこないその事故で 死んだ。」

だが許可を出した父は、自分が許可を出さなければ死ななかったと悔いた。

母が二人が亡くなった後自殺したのも、それに拍車をかけた

そして姉もそんな悲しみの中、ある男と激しい恋に落ち駆け落ちしていなくなった。

親父殿は弟たちの才と実力を信じていた　だからあの初代宗主様が編み出された、あの荒行を許可した　二人なら大丈夫と信じてな。

わしは親父殿の判断が間違っていたとは思ってない。

二人の実力は、一流といって差し支えないものだった。

不運な事故だったのだ。その事を今も悔いておられるのだろう

だから要介が可愛くて仕方ないのだろう

特にあいつは亡くなった母によく似た顔立ちだからな

「

剛主が目を閉じながら、しみじみと言う　早死にした兄弟や母たちの事を思っているのだろう。

やがて閉じていた目を開く

「すまん。つい長話になってしまった」

「「構いません」」

二人は同時に言った

「さてこの話はここまでだ。

処分については親父殿に免じて軽くしたが、他の事で償わさせるようにした。

要介たち三人には謹慎中の間働の猛稽古を受けてもらう事にした。

すでに宗主様をお願いして加倉島の使用許可を頂いた。
島を離れる事になるが、これ以上ひどくなる前に矯正しとかないと最終手段をとることになるからな」

剛主が苦虫を噛み潰したような、渋い顔をした。

剛主が言う最終手段とは暗殺の事である

それほど要介は酷いのだ。

風牙衆だけではなく、同じ神風一族の者にも自分より立場の弱い者はいじめているのだ

敬愛している道正が 懇願するため、皆我慢しているがそれも 限度がある

「父上」

父の悲壮な覚悟を聞いて、聖は憐れむような視線を父に向ける

「加倉島か？いいじゃないか無人島で思う存分しごいてやれよ」

劫獅がそれがいいと あおる。

劫獅が言うように、 加倉島は無人島である。

加倉島とは神風一族が所有する、炎術師の訓練を行うために使う無人島で、周囲の被害を気にせずに、いくらでも破壊力の高い大技を使った訓練が出来るので、 重宝されている

ただ邪竜島は人口密度が低く自然や山や 荒原が多いため、この島にいる術者たちは加倉島を使用する事は殆どないといってもゼロではないが

「それで父上、叔父貴たちをどうやって 懲らし……いやしごくの
ですか？」

聖が慌てて言い直して聞く

聖の問いにしばらく黙ってから、剛主がゆっくり答える

「絶火の行をおこなうつもりだ」

剛主は息子たちを見ながら、はつきりと言った。

「絶火の行ですか？」

聖は本気かと思いながら訪ねた

（あれを叔父たちに おこなったら、よくて病院送り、悪ければ死ぬな）

と聖は思ったが、剛主の険しい表情から 本気とわかり、黙る。

要介たちを一族から 追放しろと言った
聖ですら、要介たちに同情した。

絶火の行とは、先ほども書いたとおり、初代宗主が創った鍛錬法である。

死者が出ている事からも、わかるとおり 大変危険な修行法で危険すぎるため、三代宗主のおり、廃止され今や宗家でも、その修行法のやり方は失伝されている
が、火我家は島に孤立しており、宗家の力を頼れないため
強い術者を生み出すため密かに伝えていた。

その修行法は

赤 白 紫 の特殊な術を施した宝玉を使った組み手をおこなう事である

この特殊な宝玉は
それぞれ違う特殊能力があり

赤は炎で受ける体感ダメージが常人並みになる（つまり実際熱くないのに熱く感じてしまう）

白は気を使えなくする

紫は炎術を一時的に使えなくする（ただし耐火能力はそのままである）

の三種類でこれを2つあるいは三つまたは一つを肌に密着させると、体内に入り込み、特殊能力を発動するのである。

この宝玉は入れられた本人は取り除く事が出来ず、それを入れた者が入れられた 人間に触れて取り出すか、解除の呪文を知っている者が、唱えて解除するかのどちらかしかない

生まれた時から持っている絶対的な力を一時的に失うので大抵の者がパニックになり、大怪我もしくは死亡する。

そのためあまりに危険すぎるため廃止されたのだ

だが精神的にも肉体的にも鍛えられるので一石二鳥の修行法である（ちなみに数年後業火が聖と行う荒行は 赤の宝玉を体内に取り込んで行う絶火の行である）

話を戻そう

「そうだ」

剛主ははっきりと言う

「叔父貴たち下手すりゃ死ぬぜ」

劫獅が他人事のように言う

「大丈夫だちゃんと 加減する。

要介と共に修行するのは子供の頃以来だからな。
腕になる」

剛主がポキポキ指を鳴らしながら、言う

「これで叔父貴たちも、懲りるだろうな」

「だといいがな」

劫獅がざまあみると いう感じでいい

聖が難しそうな顔で言った。

その直後

突然三人は一斉に立ち上がり辺りを見渡す

「兄者！」

さっきまでの、陽気な感じは消え、真剣な表情で兄を見る

「ああ、父上！」

聖が自分たちと同じく立っている父を見る

「うむ。二人とも気づいたか？」

「気づくに決まってるだろう、こんな莫大な炎の精霊の気配今まで感じた事ないぞ」

「とてつもない力です」

聖が冷や汗を垂らしながら言う。

三人が急に立ち上がったのは、この凄まじい炎の精霊の気配を感じたからだ

ただし、剛主は二人と違いこの凄まじい炎の精霊の気配に覚えがあるので、二人以上に動揺していた。

（この感じはまさか……いやだが以前に感じたのと同じだ）

剛主は何度も違うと 否定しようとしたが、この気配に精霊数に納得するしかなかった

「誰か誰かいないのか？」

剛主は状況を把握するため人を大声で呼ぶ

直後

「おい！どうなってんだこれは」

劫獅が叫び声をあげた

今まで感じていた、炎の精霊の気配がさらに増大したからである

ドォーン

それから凄まじい爆音が鳴り響いて、屋敷を震動させる

「うおっ」

「くっ」

「これは」

三人が屋敷の揺れた震動で倒れそうになるが、耐える

三人が震動に耐えて何とか立っている時に、ドタドタと足音が聞こえてくる

足音の主は、声もかけず、部屋に飛び込んで来た。

使用人にあるまじき行いだが、緊急事態なので剛主たちは気にしな

い。

「おお当主に聖様に 劫獅様も」

なりふり構わず、飛び込んで来た使用人は剛主たちの顔を見て安堵の笑みを浮かべた

「一体何事じゃ？
詳しく話せ」

剛主は使用人にきつい口調で聞いただす。

使用人はその声を聞くと、安堵の笑みをやめ、剛主に報告をする

「大変でございます

業火様が眠っているところに、哲志様と幸太様が寝込みを襲撃。

諫めようとした使用人が巻き込まれ死亡。

どこからか侵入した 風牙衆の少女も怪我を負い、それを見た業火様が反撃を、
それで戦闘に、我らではとても止められません」

使用人は最後は泣きそうな声で言う。

「わかった。

行くぞ業火を止める」

そう言いながら、聖が走って部屋を出て行く

「待てよ兄者、俺も行く」

部屋を出て行った兄を劫獅が慌てて追いかける

「待て二人とも、先走るな」

剛主が止めようとするが、間に合わず二人は行ってしまっ

「まずいな僕の予想が正しければ、二人ではとても止められん。

真野」

剛主は二人が行ってしまった方を見ている使用人の名前を呼ぶ

「何でしょうか」

真野は慌てて振り返って答える

「お主はただちに、火野と燈野両家に行き当主たちを呼んでくるのじゃ」

「当主様たちをですか？」

真野は主の突然の命令に戸惑う

「ああ当主クラスの実力がないと役には立たん」

（出来れば宗家に救援を頼みたいが、到底間にあわんな）

「それは一体どういう」

「説明している暇はない。」

後で言うからすまんが今は急いでくれ」

と剛主が頭を下げる

「承知しました」

主に頭を下げられた使用人は素っ頓狂な声をあげ、急ぎこの場から離れていった。

それを見送った剛主はため息を1つついた

「はあ」。火野と燈野の当主が来ても焼け石に水だろう。
よもや分家が神災を相手にする事になるとはな」

剛主は何度か宗主や巖馬と退魔を行っていたからわかったのだ。

この今感じている、炎の精霊の凄まじい気配が神炎のものであることが

「巖馬様や宗主様に は及ばずとも、綾乃様の黄金の炎の力は超えていよう

寝込みを襲われ、人を傷つけられた怒りで目覚めたか、さすがは宗家の血脈よの どうやら神風頼道という男は、術者としては大した事ないが 種としては優秀なようだな。

美々子^{みみこ}

安心しろわしの命に変えてもお前の忘れ形見は守ってみせる」

決死の覚悟を亡き妹に誓った後、剛主は 神炎に挑むため、部屋を出ていくのだった。

「何だこれは？」

「やばいんじゃないの兄貴」

急いで走ってきてやつとついた業火の部屋で二人は信じられないものを見た

相変わらず圧倒的な 炎の精霊の気配は今なお続いている
あまりの精霊の密度に押し潰されそうな 圧迫感を感じる

「業火お前」

二人は同じセリフを同時に言った

その声を聞いた業火が強烈な殺気をまといながら、二人を見る。

振り向いた業火の周りには、気絶している少女と、体を半分以上焼かれて事切れている死体があった

「あと一人」

業火はそう言った後

うおおお！と雄叫びを上げた

雄叫びが轟くと同時に、業火の周りから凄い勢いで火柱が噴き上がる

灰色の炎の火柱が六本業火の周りを囲むように顕現する

その火柱を見て、聖と劫獅は思わず数歩後退し、体をぶるぶるとふるわせる

「なああれって」

劫獅が業火を指をぶるぶる振るわしながら指す

そんな恐怖をあらわにする弟を苦しげな顔で聖は見る

「おそらくお前の予想は当たってる」

聖は劫獅から視線を外し業火を見る

「実際に見るのはこれが初めてだが、
黄金の炎を超える圧倒的なエネルギー
間違った神炎だ」

聖は灰色の神炎をまとうもう一人の弟を　見ながら、戦慄するのだ
った。

第三話番外編（回想2、炎の少年激怒 目覚める力その1）（後書き）

いかがだったでしょうか？

ではご意見 ご感想お待ちしております

ありがとうございました

第三話番外編（回想2 炎の少年激怒目覚める力 その2）（前書き）

今晚は遅くなりましたが更新です

第三話番外編（回想2 炎の少年激怒目覚める力 その2）

ここで話は業火が兄たちと対峙する
一時間前に遡る

火我家邸内

ここは火我要介の長男哲志の部屋である。

現在この部屋にいるのは二人

一人はこの部屋の主 哲志そしてもう一人は弟の幸太である。

部屋にいる二人は共に対面して座り、膝を近づけて話しこんでいる。

「くそ！何で俺たちが謹慎なんだ。
これじゃ遊びにも行けないじゃないか」

哲志は大声で己の怒りをぶちまける

完全な逆恨みだが、 愚か者はそれを知らない

「本当だよ。業火の奴も何で怒ったのかわからないよ。

あいつら風牙衆を囷にするなんて大人たちだってよくやるじゃんか」
幸太も兄に同意し、何ら悪いと思わず言う

屋敷に戻った後、二人はすぐさま謹慎を言い渡された

本当なら自分の部屋にいなければ、ならないが兄に呼び出された幸太は兄の部屋にいる。

まあ隣の部屋同士なので移動は簡単だ

謹慎を言い渡された二人は、屋敷を出ることもままならず、
ま
た遊ぶ事もできないので
(ゲーム機や漫画は没収されている)

こんな目にあう事になった原因の業火を恨んでいるのである

特に哲志の怒りは凄まじく、何度も業火殺す、業火殺すと目を血走らせながら言ったりしている

7つも年の離れた

従兄弟にまるで虫けらでも見るような目で見られ、殴られ失神させられたのだ。プライドの高い彼には耐えられない屈辱である。

さらに業火の兄たちにも、到底かなわないのにその弟にも、かな
われないなど、哲志にとっては断じて許せる事ではなかった。

もし業火が宗家の隠し子である事を彼らが 知っていれば、少しは我慢しただろうが、この事を知るのは一部の者だけなので、彼らは知らなかった

彼らの父である、要介ですら、亡き妹の子供であると知っていても、父親が誰かまでは知らないのだから仕方ない事だろう。

ゆえに彼らの怒りは とどまる事を知らないまま高まり、やがて怒りが殺意に変わっていくのだった。その殺意から来る行動によって、とんでもない大事件を引き起こしてしまう事になるなど、神ならぬ彼らは無論知るよしもない。

しばらく業火を罵っていた二人だったが、突然兄の哲志が立ち上がる

「兄さんどうしたの？」

急に立ち上がった兄を見て幸太もつられて立ち上がる

立ち上がった弟を見ながら、哲志は邪悪な笑みを浮かべた

「行くぞ幸太」

「行ってくてどこへ」

突然、行くとわれて意味がわからず、幸太は聞く

「決まってるだろう！」

哲志は大声で言う

「業火をぶつ殺しにいくんだよ」

「ぶつ殺すって？」

「そうぶつ殺すんだよ。」

今のあいつはぐっすり寝ている、寝ている状態なら、反撃も出来ないだろ。

あいつのせいで、しばらく針のむしろなんだ。

あいつに仕返しして何が悪い」

哲志は勢いこんで、自分勝手な事を言う

「そりゃ謹慎には腹たってるけど」

「だろう！大丈夫だ　って俺ら二人がかりなら、楽勝だ。」

すぐぶっ殺して急いで帰ってくりや問題ないって」

「でも誰か看病してるだろうし……」

兄の提案に幸太は尻込みするが、兄は気にせず続ける

「看病してるのは、どうせ一般人が風牙衆だからどうとでもなる。

あのガキの整った顔を俺の炎で元の顔がわからなくなるくらいまで、燃やしてやる」

そう言って狂気の笑みを浮かべて笑う

「さすがにそれはやりすぎなんじゃ……」

兄の常軌を逸した発言に恐怖した弟は、
なだめにかかる

「やりすぎなもんか！

お前は知らないだろうから教えてやる

業火はな剛主おじさんの子じゃないんだよ」

兄のいきなりの暴露発言に幸太は驚く。

「ええ！それ本当なの兄さん
じゃあいつは僕たちの従兄弟じゃないの？」

幸太がそう言いながら首を傾げる

「いや従兄弟ではある。
あいつの母親は、お爺さまの愛人であった風牙衆とお爺さまの間に
出来た隠し子さ。
父さんの腹違いの妹にあたる

業火を産んでから、しばらくしてから亡くなったんだってよ 父さ
んが昔言ってたんだ」

「じゃあ業火の父親は誰なんだよ」
気になった幸太が兄に聞く

「それは父さんも知らないそうだ。
まあどうせ、ろくでなしだと思っけどな

これでわかっただろう。

風牙の血が流れる業火なんかの風下に俺らがいるなんて、絶対に許されないんだ。いいか幸太これは、神風のためだ。屑の血が流れる、業火に罰を与えるんだ。

みんなもこの事を知れば、俺たちが正しい事をわかってくれる。

行くぞ幸太、あいつが起きる前に、やっちまうんだ」

哲志は部屋のドアを開けて、弟を手招きする。

「わかったよ兄さん」

幸太は兄の手招きに応じるのだった。

「よく眠っておられる」

業火の看病を任された使用人の男は、眠る業火の頭を撫でた

業火を見る目はまるで父親が子を見るような優しい眼差しだった。年齢も四十半ばなので、息子がいてその息子を重ねているのかも知れない

この使用人は土橋と いい、火我家に仕える使用人だ。

一般人であるため、魔術は使えないが、格闘技に長けている 当主の信頼もあつい

業火が倒れて意識を失ってから、数時間たったが、いまだ少年は昏々と眠り続けている。
ただ外傷もなく、顔色もよいので、じきに目を覚ますだろうと土橋は思っている

土橋は慈愛に満ちた目で業火を見ていたが、ちらつと部屋の窓を見てガラスと窓を開ける

「外で見えていても見舞いにはならないよ さあ入りなさい」

土橋は窓の外にある 何もない空間に向かって独り言を話す

独り言ではなかった

「宜しいのですか？」

高い女の子の声が聞こえたかと思うと、 何もない空間が歪みそこから宙に浮く、 どこか悲しそうな顔をした少女が現れた。 薄幸の美少女という のがぴったりの少女 風祭静和だった。

「業火様の事が心配で見舞いに来てくれたんだろう。 そんな相手を追い返したら後で業火様に私が叱られてしまうよ」

さあどうぞという感じで土橋は窓を開け放ち、 手のひらで、 部屋を 指す

静和は少し戸惑った後、 空を飛んで窓の外から業火の部屋に入った ちなみに業火の部屋は二階にある

「業火様……」

部屋に着地した静和は、 眠る業火を泣きそうな顔で見つめるのだった。

（良かった顔色も悪くないし、気持ち良さそうに眠ってらっしゃるわ）

静和は業火のぐっすり眠っている姿を見て安心した。

業火がシイを全滅させて倒れた後、駆けつけた術者たちとともに、火我家についた後、術者たちに家に帰るよう言われ一旦は家に帰ったが、やはり業火の事が気になり、火我家にやってきた。

しかし風牙衆である 自分が、火我家に入る事は出来ないのてこうして、風術で隠れて窓の外から業火の様子を見ていたと いうわけである。

「そんな遠いところにいないで、もっと側にいつてあげるといい」

開け放った窓を締め終わった、土橋が背後から声をかけてくる

「いいんですか？」

静和が、おっかなびっくりな様子で確認を取ってくる

土橋はそれに、優しく答える

「どうぞ。業火様もお喜びになります。もし他の者が来ても私が許可したと、ちゃんと言いますので 安心して下さい」

そう言うてにっこりと笑うのだった。

それを見た静和は、深く土橋に頭を下げると、すぐさま眠る業火の元に向かった。

静和は業火の眠る布団の側にやって来て よく眠る業火を見ると、ぼろぼろと涙を流しながら

「業火様ご無事で良かった」

言った後、嬉し涙を流し続けた

そんな泣きじゃくる 静和に横から涙を拭くように、土橋がハンカチを差し出してくる

「あり、ありがとうございます」

静和は涙を拭った後
泣くのをやめた

「業火様の事がそんなに大事かい？」

土橋の質問に静和は　きっぱりと

「はい」

と答える

「そうかい。　業火様は優しいからね」

「はい。」

業火様は私を助けてくれました。
情報以上の妖怪に襲われた時哲志様と幸太様は私を囨にして　逃げ
るという作戦をとろうとしました。
私もそれに従うつもりでした。

亡くなった父も幽になって死にましたから。
風牙衆だから仕方ないと思いました。

でも業火様だけは、それに反対してくださり、結局哲志様と幸太様
を無理やり黙らせて一人で妖怪を退治しました」

静和は眠る業火を愛おしそうに見ながら、言う

それはどこからどう見ても恋する乙女だった。

そんな静和を土橋は憐れみをこめた眼差しで見る

「君のような女の子に思われて業火様は 幸せだね」

土橋はしみじみと言う

「そうでしょうか？」

静和は自信なさげに答える

「女の子に想われて嬉しくない男なんていないよ。」

まして君みたいな美少女に想われて嬉しくないなら、それは男じゃないね」

「そんな……美少女じゃないですよ」

静和が真っ赤になって否定する

「ははっ、そんな初々しいところもポイント高いね」

「はぁありがとうございます」

静和は小声で一応礼を言う

「大変だね。君たち風牙衆は、好きな男の子の見舞いすら、堂々に行えないとは だがつらいと思うが 頑張ってほしい」

神風一族の者、全てが風牙衆を蔑んでいるわけではないのだ
業火様のような方だっている

数は少ないが零では ないのだ

業火様のお父上の剛主様や先代当主の道正様や業火様の兄上 聖様
他にも何人かいる

それに東京の宗主様　も風牙衆の扱い改善のために骨を折っている
そうだ。

今すぐにとはいかないが、希望を持って生きて欲しい」

土橋はまるで娘に話しかけるように、慈愛を込めて言う

「わかりました」

と静和が言う

「ありがとう。」

まあ君が業火様に嫁入りすれば、より早く改善出来るだろうね」

「お嫁さんだなんて　とんでもないです

そんなの許される訳ありません」

静和は真っ赤になりながら、首を振る

「嫌がらないと言う事は、　なってもいいと思ってるわけだ」

と土橋が揚げ足をとる

「それはその……」

静和はそれだけ言っただけ俯いて黙り込んでしまう

「ああすまない。」

少し悪ノリがすぎたね」

そう言っただけ土橋が、 静和に謝る

「いえ気にしないで下さい」

顔を上げて静和がそう言う

その時

バーンとノックも無しに部屋のドアが蹴り開けられた

そこには二人の少年哲志と幸太である。

「哲志様に幸太様」

土橋がドアを蹴り開けた二人の元に来る

哲志は眠る業火を見た後そばにいる静和を見る

「何で風牙衆が、火我家にいるんだ？」

不思議そうな顔をして哲志が言う

それに土橋が答える

「私が許可しました 彼女は業火様を心底心配しているので、見舞いをする資格があると思いましたので、当主には後で私が話します。」

ところでお二人は何故ここに？ 謹慎中だったのでは、ないのですか」

「何俺たちも見舞いだよ従兄弟の見舞いにな、なあ幸太」

哲志は隣にいる弟に同意を求める

「はい兄さん」

と幸太が頷く

「そういつわけだからいいだろ」

哲志が土橋に聞く

当然哲志は許可すると思ったが、土橋は哲志の予想と反対の答えを出した

「申し訳ありませんが謹慎中のお二方のお見舞いはお断りさせていただきます」

土橋は丁寧な口調で 断る

一瞬哲志は何を言われたか理解できなかったが、すぐに気づき、烈火のごとく怒る

「はあ！使用人がご主人様に逆らってん じゃねえ」

哲志は大声を上げる

しかし土橋はひかない

「お二方は部屋で謹慎するよう当主様より命令があったはず この場は見なかった事にいたしますので、お引き取りを」

土橋は有無を言わせぬ口調で言い頭を下げる。

「ちょっとぐらいいいだろうが、従兄弟の見舞いに来てんだぞ」

哲志はそう言いながら横を抜けようとするが、土橋は横に移動し哲志の前に立ちふさがる

そんなやりとりを静和ははらしながら見ている

「デメエどういっつもりだ！」

哲志が土橋の首根っこを掴み言う

かなり哲志は力を込めて掴んでいるが、土橋はあっさり外す

「テメエ」

哲志は憎しみをこめた眼差しで、土橋を見るが土橋は気にせず冷静に言う

「哲志様先ほど、どういっつもりとおっしゃいましたね。」

そのセリフそっくりそのまま返させて頂きます

そちらこそどういっつもりですか？

本当に見舞いに來たのなら、私も追いついたりはしません

ですが哲志様あなた先ほど業火様を見た時、明らかに殺氣を向けてましたね

それが見舞いをする者の態度ですか。

とにかくあまり遅くなると人目につきます、さらにお叱りを受ける前にお引き取りを」

土橋はそう言った後、二人にお引き取りをと部屋のドアを差ししめす

「テメエ使用人の分際で……」

哲志が拳を握りしめながら、土橋を睨みつける。

「お引き取りを」

土橋はそう言つて頭を下げる

「わかった」

哲志がそう言つて

一安心した土橋が顔を上げようとした瞬間

部屋の中が突然熱気に包まれ、ボウツと 何かが燃える音がした。

「何を！」

土橋は頭を深く下げていたので、反応が遅れる

そこへ

「邪魔するなら死ね！」

炎を右拳に纏った

哲志が飛びかかってくる

「血迷われたか！」

土橋がそう言いながら、避けようとするが、反応が遅れたので間に合わない

空中から飛びかかってきた、哲志の右拳 が土橋の顔面を殴りと
ばし、土橋の顔面が炎に包まれた

「グワァア」

土橋が燃えてる自分の顔を両手で抑えて
呻く

「嫌あああゝ！」

顔面が燃えてる土橋を見た静和が悲鳴を上げた

第三話番外編（回想2 炎の少年激怒目覚める力 その2）（後書き）

いかがだったでしょうか？

予定が変わりしばらく過去編が続きます

読んで頂きありがとうございました

第三話番外編（回想2 炎の少年激怒、目覚める力 その3）（前書き）

今晩は最新話をお送りいたします

気に入って頂けたら幸いです

第三話番外編（回想2 炎の少年激怒、目覚める力 その3）

「うるさい奴だな」

哲志がそう言いながら叫んだ静和を見る。 静和は叫ぶのはやめたがその体はブルブル震えている。

怯えているのは明白だ。

そんな静和に哲志は右手で狙いをつける

「邪魔だ」

哲志はそう言いながら右手に火球を生み出す。

そしてその火球を容赦なく放とうとするが、突然ガシッと背後から何かが哲志の足を掴んだ。

哲志がうつとうしげに振り返ると、そこには、顔を炎に焼かれながら、生きている土橋が哲志の足首を倒れながら、掴んでいた。

「しぶとい奴め」

哲志はうつとうしそうに言いながら、掴んでいる手を力任せに、足を動かして外すとその足で土橋の背中を踏みつけ、体重をかける。

「うつつ……」

土橋が呻き声を上げるが、気にせず今度はグリグリと足を動かして、踏みにじる。

やがて飽きたのか、哲志はやめて足を離す。

土橋はまだ生きているが、一言も喋らず、ピクピクと微かに指先を動かすだけだ。

死にかけている　だがそんな土橋を見ても哲志は何とも思わない。

「本当にしぶといな。　まだ生きてやがるでも……これで終わりだ」

哲志はそう言つと

炎を手の平から放ち土橋の全身を焼く

数十秒後

悲鳴を上げる事もなく土橋は灰になるまで焼き尽くされたのだった。

「馬鹿がご主人様に逆らったりするからだ」

目をギラギラさせた哲志が消し炭となった土橋の灰目がけて唾をぺっと吐く。

人一人殺したのに欠片も罪悪感はないようだ。

（何て事を）

静和はあまりの惨劇にそれが現実とは とても思えなかった。

だが彼女の思いも虚しくこれは現実なので、時は進む。

「さて風牙衆次はお前の番だ」

哲志がまるで死刑宣告でもするように、きっぱり言ってくる。

それと同時に背後で見ているだけだった幸太も、兄の隣に並ぶ

「兄さん後は女一人と寝ている業火だけだ。

早く終わらせよう」

兄が派手に暴れたので露見を恐れた弟が急かす。

「わかつているみなまで言うな。

元よりそのつもりだ」

哲志は邪悪な笑みを浮かべると両手を業火と静和目掛けて突き出す。

兄が手を突き出すのを見た幸太も、同じように両手を二人目掛けて突き出す。

そして炎の精霊を呼ぶ。

（このままじゃ やられる何とか業火様を逃がさないと）

静和はそう決意すると風の精霊を呼ぶ。

静和が風の精霊を呼び始めたのに、哲志と幸太は無視した。

非力な風の精霊を喚んだところで、問題ないと判断したのだ。

それより炎の精霊を喚べるだけ喚んでより強力な攻撃をするべきと二人は判断したのだ。

その判断どおり哲志と幸太が、直径二メートル程の大きな火球を自分たちの手の前に作り出す。

「死ね」

「くらえ」

二人がそれぞれ違うかけ声で、火球を放とうとするより僅かに早く、静和の術が完成し発動する。

たちまち空間内を耳障りな音が侵略し、辺りを包んだ。

騒音である。

静和は風の精霊を使い、騒音を生み出したのだ。

せこいが効果は絶大で哲志と幸太はうずくまって、耳を押さえている。

「今！」

静和は風を起こし寝ている業火を風の精霊に手元まで運んできてもらう。

元より非力な自分の風術で炎術に勝てるとは思っていない。

優先すべきは業火の安全だ。

静和は敵が悶えてる間に、窓から出ようとし、風を纏い空に浮く。

手元に浮かしている業火は多少首を振ったり、うーんと言ったりするが、起きてはいない。

そんな業火を静和は優しい眼差しで見る。

「少し我慢して下さい業火様。

なるべく揺れないようにしますので」

そう言つて業火に断りをいれた静和は、窓向かつて飛んでいく。

「ふざけんじゃねえ！ このまま逃げれるとも思つてんのか」

飛行中に背後から大声が聞こえて振り向くと猛スピードで飛んでくる哲志がいた。

幸太はまだ耳を押さえて呻いているが哲志は弟よりタフなように、早く回復したようだ。

回復した哲志はどうやら炎を背後に撃つて、その爆発を推進力にして飛んできたようだ。

飛んできた哲志は空中で炎の火球を作り出す。

人の頭ぐらいの大きさの物を五つ作る。

「業火と一緒にあの世に送ってやるぜ」

哲志はそう言いながら、火球を五つ全て業火に向けて放った。

猛スピードで五つの火球は眠りながら、空中に浮く業火目掛けて飛んでいく。

「業火様！」

静和は風の結界を二重にも三重にも張ると、火球と業火の間に飛び込み迷う事なく盾となった。

「業火様〜！」

盾となった静和は着弾の衝撃で壁に叩きつけられるのだった。

空に浮いていた業火も静和の集中力がきれ術が解けたので、そのまま落下して 地面に叩きつけられる。

「ちっ 業火にあてそこなっ たぜ」

地面に着地した哲志は、業火を守って壁に叩きつけられた静和を忌々しそうに見た。

「兄さんやったね」

やっと騒音から回復した幸太が、哲志の隣にやってくる。

それをちらっと見て哲志は確認した。

「回復したようだな幸太。
炎術は使えるか？」

哲志が幸太に確認をしてくる。

「大丈夫だよ兄さんまだ頭が痛いけど 炎術を使うのに問題はない」

幸太の答えを聞いて哲志は満足げに頷く。

「うん。本当に大丈夫なようだな。だったらお前はあのくたばりぞこないの、風牙衆にとどめを刺せ。」

可能性は低いが、さっきの例がある。 業火に仕掛けてる時に背後から何かされてはたまらんからな。
念には念というしな。

どうだやれるか？ 無理なら俺がやるが」

哲志は幸太を気遣いながら言う。

「心配しないで、兄さん。 死にかけの女の一人や二人楽勝だよ」

幸太は大船に乗ったつもりでいるとばかりに、胸を叩いて堂々と言う。

「わかった任せた。俺は業火をやる」

哲志はそれだけ言うと、地面に叩きつけられた業火目指して歩いて行った。

「了解兄さん」

幸太は手を振りながら、兄を見送った

「さてと……」

哲志を見送った後幸太はうつ伏せに倒れている、静和の方に歩いていくのだった。

「う…業火様は？」

静和は体を上半身だけ起こして、周りを見て業火を探す。

探した業火は仰向けに倒れていたが、火傷等は見あたらなかった。落下のダメージは受けていても、炎のダメージはないようなので、ひとまず静和は安心した。

しかしその安心もすぐになくなった。

業火の方に歩いていく哲志が彼女の視界に入ったからだ。

「大変、ぐっ」

静和は急いで立ち上がろうと体を起こそうとするが、そこへ何か降ってきて強制的に静和を地面に押し込む。

幸太が足で静和の頭を踏んづけたのだ。

そのまま容赦なくグリグリと踏みにじる。

「ううつ…ぐああ あ!」

静和が一際大きい呻き声を上げる

幸太が炎の精霊を操り足に火を宿して、焼いているのだ。

肉が焦げる嫌な臭いが辺りに充満し、静和の髪から煙が、ちよつと昇っている

煙が上がるのを見た幸太は踏んでる足をどけて、今度は髪の毛を鷲掴みにして 体を起こさせる。

「まだまだこんなもんじゃすまさないぜ、たつぷりさっきのかりを返してやる」

幸太は醜く笑いながら、片手で静和の髪を掴んで立たせ、その腹にパンチをぶち込むのだった。

「幸太の奴め！

遊びやがって……まあいいか後は眠ってるガキをぶっ殺すだけだしな」

哲志は弟の悪行を呆れた様子で、見ながら呟いた。

女の子をぼこるといふ酷いおこないだが、日頃大人の術者たちのレイプやリンチを見ている、幸太には日常光景に過ぎないのだ。

しばらく幸太と呻き声を上げる、静和を見ていたが、やめてすぐさま業火を見る。

業火は体を揺すり 寝返りを何度もうっていた

「まずいな、さすがに床に叩きつけられたら、極度の疲労でも目を覚ますか、起きる前にけりをつけないと面倒だな」

哲志は業火の様子を見ると、すぐさま仕留めるべく、炎の精霊を両拳に纏うのだった。

「うゝん」

仰向けに倒れていた、業火がぼんやりとしながらも目覚める。

「ここは？ 確か俺は山でシィどもを倒した後倒れて……なんだ！ この精霊は」

眠気眼を擦りながら、ぼんやりしていた業火が無数の炎の精霊を感知し、完全に目覚める。

「くそ！ 起きたか眠ったままなら、苦しまずに逝けたものを」

「この声は哲志？」

業火は声を聞いて、哲志を見る。

二人の視線があう。

「哲志てめえ何の真似だ！」

業火が哲志が両拳に炎を纏っているのを、見て大きな声を上げる。

哲志は業火の大声を全く気にせず、両拳に炎を纏いながら、近づいてくる。

「狙いは俺か。
俺を殺すつもりか」

哲志の身边に漂う殺気を感じその意図に気づく。

「そうさ。 お前みたいな風牙衆の血が流れた穢れし炎術師は、神風にはいらなんだよ」

そう言いながら、哲志は炎の拳で業火に殴りかかる

ブンツと力任せに振るったパンチが業火を襲う。

しかし業火はあっさりその攻撃を避けると、そのまま哲志の懐に入り込んで、掌底を叩き込む。 気を込めた一撃は、哲志の腹に深くめり込んだ後、哲志は呻きながら、その場で両膝をつき、そのままゆっくり前のめりに倒れる。

「全く闇討ちでも何でもやってこいとは言ったけど、本当にやってくるとは、想像以上の馬鹿だな」

業火は、哲志を呆れた表情で見る

「ギャーッ」

業火の耳にいきなり少女の断末魔の悲鳴が入ってきた。

「ん！」

業火が声の聞こえた方を急いで見ると、
静和が幸太に腹を
炎の手刀で突き刺されていた。

「風祭…… 静和……!!」

業火はその光景を見て少女の名を叫ぶのだった。

「業火、いつの間に」

静和をいたぶりながら、ハイな気分になっていた幸太は、
業火
が起きたのに今気づいた。

「兄さんはどうしたんだ……そんな兄さんがやられたのか？」

「だったらこいつに構ってる場合じゃないな」

幸太は哲志がうずくまって倒れているのを、見つけると業火を迎え討つべく、片手で掴んでいた静和を放り出そうと、手をはなす。

手をはなされた静和は重力に逆らわず床に向かって倒れていくが、ヒュツと風が吹く音がしたかと思うと業火が、いつの間にか後ろにいて静和を抱き止めた。

気の力を使い超高速で移動したのだ。

業火は抱き止めた静和の顔を見て愕然とする

静和の顔は青白く、また触れた肌は驚くほど冷たかった

その事から業火は静和が致命的なダメージを負ったのを悟る。

（くそ！これじゃあ手の施しようがねえ）

業火は心の中で、毒づくている間に、静和が業火に助けられたのに気づき、見つめていた。

「業火……様」

静和は弱々しい口調で、目を潤ませて業火に話しかける。

「喋るな傷に触る　すぐに医者に見せてやるから、じっとしてろ」

業火はぶつきらぼつに、言いながらも目は気遣わしげに静和を見る

その様子から静和を心底心配しているのがわかる。

静和はそんな業火の様子に愛しさがこみ上げてくるのを、自覚し

た。

このまま業火の言葉に甘えなくなるが、首を降って口を開く、伝えるべき事を伝えるために。

「いえどうしてもお伝えしたい事があります」

「喋るなど言っただはすだ。

いいから寝てろすぐに終わらす」

業火は今度は静和の顔を見ずに言う

「いえ今でなければいけません」

静和は小さな声だが、はっきりと言ひ己の意志を示す

「何だ？」

業火は優しい声で言いながら、小さな声しか出せない静和に無理をさせないように、自分の耳を静和の口元に近づける。

静和は

「ありがとうございます」

と満面の笑みを浮かべながら言ってからすぐに伝えるべき事を小声でたどたどしく言う。

その静和の言葉を業火は一字一句聞き逃さず聞く。

話を聞きながら、業火の体が小刻みに震えているのは、気のせいではないだろう。

静和は力を振り絞って、最後まで言い終わると目を閉じた。

「静和」

業火は少女の名前を呟いた後頭を優しく撫でた。

それから胸に耳を当てて心音を聞いてまだ生きている事を確認する。

恐らく助からないだろうと業火は思ったが、せめて黄泉の旅路への手向けでも送ってやろうと、決意する。

「静和、俺がお前をこんな目にあわした奴と、罪もない使用人の土橋を殺したこの馬鹿どもを討って仇を討つ。それが俺に出来る唯一の手向けだ。」

俺に出来るのはそれだけだ

お前の命がある間に 決めるから安心して逝ってくれ」

業火はそう言つと、静和を部屋の端っこまでお姫様抱っこで運び、床にまるで壊れ物でも扱っているみたいに丁寧に丁寧に下ろす。

その後炎の精霊に頼み結界を張り、横たえた静和を包む。

守ると言うより、命尽きた後に静和の死体が傷つかないようにするための処置だ。

静和が炎の結界に包まれたのを確認した後。

業火は幸太の方に 振り向いた。

「うっ」

幸太は振り向いた業火を見て両膝が震えて倒れそうになるが、何とか踏ん張る

幸太はあまりの恐怖のために、声も出なかった。

「静和から話は聞いた」

そんな怯える従兄弟を業火は無視して淡々と自身の言葉を続ける

「使用人の土橋を殺したんだってな……それだけじゃねえ、静和も致命傷を負った、助からないつまり静和も殺しやがったんだ」

業火は静和から聞いた話からその殺された使用人を土橋と判断していた。

業火は淡々と言いながらもその内に、凄まじい怒りを宿し、その怒りに応え炎の精霊が続々と集結してくる。

「ひゃあああ」

業火の周りに集まっている尋常でない精霊の数を見た、幸太は脇目もふらず、部屋のドアめがけて走り出した。

やられた兄の事など頭にはない。

己が無事に逃げる事しか頭になかった

そんななりふり構わず無様に逃げていく、従兄弟の背中を心底軽蔑しきった眼差しで業火は見ながら、片手を幸太目掛けて突き出す。

「炎よおお！」

業火が力の限り叫び声を上げると同時に炎の精霊たちが歓喜の声を上げて、黄金の炎となって顕現する。

黄金の炎は眩しい輝きとなって辺りを照らす。

その眩い美しい炎がレーザー砲と化して、幸太に放たれる

炎の精霊を業火が凝縮しうる限り、凝縮した一撃は、幸太の右腕を跡形もなく、

消し飛ばし、レーザー砲は壁に激突する

が壁は碎けもせず、焦げ跡一つついていなかった。

業火が炎を完全に制御しているのだ。

これほどに完璧な制御が出来るのは、神風宗家といえども 宗
主か敵馬のどちらか二人だけだろう。

あまりにも激しい怒りが業火を急激に成長させたのだ。

「ぎゃああ！…… 痛い」

しばらく消し飛ばされた腕を見ていた、幸太がやっと伝わってきた痛みに腕を抑えて呻く。

業火は呻く幸太にとどめを刺すべく、再び精霊を凝縮しだし
レーザー砲として 発射しようとする。
今度は腕ではなく、体全体を狙う。

「待て待ってくれ！ 僕は兄さんに従っただけなんだ。

悪いのは兄さんなんだ。

僕はとめたんだ、でも聞かなくて、しかたなく従っただけなんだ。だから許してくれ」

幸太が涙を流しながら、片手で拝みながら命乞いする。

しかしそんな身勝手な願いなど業火の怒りを増長させただけだった。

「言いたい事は、……それだけかあああ！」

業火が激怒し鬼の形相となる。

それによりただ幸太を殺すだけに集中した業火は、更なる力を覚醒させ次なる境地に達する

果たして彼は気づいただろうか、自身が纏う黄金の炎が、怒

声と同時に灰色の色となったのを

恐らく気づいてはいないだろう。

業火は無言でその灰色の炎のレーザー砲を、他人のせいにして必死に自分の命乞いをしている、愚か者向けて放った。

一直線に猛進したレーザー砲は幸太を跡形もなく焼き尽くして壁に当たった後消滅した無論壁には焦げ目一つ付けていない。

愚か者とはいえ、従兄弟の最後を見届けた業火は

「うおおお！」

と部屋全体を震わすような叫びを上げる。

「もう一人」

叫び声を上げた後、一人呟いた業火は 次なる敵を倒すべく動き出すのだった。

その体に神炎という絶対の力を纏いながら

第三話番外編（回想2 炎の少年激怒、目覚める力 その3）（後書き）

いかがだったでしょうか。

次回はカナタさんのサタンオブブラックファイアーの主人公由希君に出てきてもらう予定です

過去編という初めての試みに、苦悩しています

ご意見 ご感想等いつでもお待ちしております。

気が向いた方は宜しくお願いします？

第四話（炎の少年の決意と風の少女の思い）（前書き）

今晚は、涼しくなりましたね。

最新話遅くなりましたが、投稿します

今回はカナタさんの作品の主人公黒野由希君たちが登場します

第四話（炎の少年の決意と風の少女の思い）

「風祭静和？」

業火が隣にいる少女に呼びかける

「……」

少女は反応しない

もう一度、今度は耳元で少女の名を呼ぶ

「風祭静和」

それでも反応しない

「……」

「静和ー！」

忍耐の限界がきた業火は、少女の名を叫んだ

「……えっ？」

思いが通じ、その叫びに少女がやっと小さな声で答える

「やっと気づいたか」

三年前の過去を思い出していた静和は業火によって回想を中

断され、現実に戻ってきた。

歩きながら、かなり思い出していき、一人の世界に入り込んでいたようだ。

「業火様何でしょうか？」

と静和は業火に返事を返す

静和の答えを聞いた業火は、呆れたような表情をして言う

「何でしょうかじゃない。」

さつきから何度も話しかけたのに、全く気づかないで、上の空じゃないか？

何か心配事でもあるのか？」

最初はきつい口調で最後だけ優しい口調に変えて、業火が静和を心配する。

そんな自分を気遣ってくれる業火を、静和は嬉しく思う。

「気づかって頂いて、ありがとうございます。」

大丈夫です心配事はありません。

少し昔の事を思い出してそれに集中しすぎただけです」

静和は業火に丁寧に事情を説明する

「昔の事？」

業火は首を傾げながら、疑問を口に出す

「はい三年前の事を」

静和は思いつめたような顔をして、 呟く

「三年前か……」

三年前と聞いた業火は、苦しそうな顔をして、呟く

この二人にとって三年前というのは、禁句のようだ。

「あの事件の事を思い出していたのか？」

業火が静和に優しく声をかける

「はい」

静和は俯きながら、いつもより低いトーンで答える

「まあ三年前で思い出すって言ったら、あの事件しかないもの
な」

「そうですね」

静和が業火に同意する

「身内が亡くなったのか」

業火がすまなさそうな感じで言う

「いえ幸いあの時は私が重傷を負っただけで、家族は無事でした」

「もしかしてその怪我は俺のせいか」

業火が静和に辛そうな声で、確認するように言う。

「いえ私の怪我は 業火様のせいではありません」

静和が首をふりながら、大きな声できっぱり否定する。

「そうか」

静和の答えを聞いた業火は、ほっとして安堵するのだった

「……すまない、
恥ずかしい話し何だが、あの事件の事はあまり覚えてないんだ。
自分でおこした事なのにな」

業火が、頭に手を置いて己を恥じる。

「仕方ないですよ 業火様はあの時十一歳だったのですから、覚えてなくて当然ですよ」

静和が慰める。

「そう言ってくれるのは嬉しいが、自分が起こして死人も出てるというのに、覚えてないではな。
あの時は兄貴や親父たちなど、多くの人たちに迷惑をかけたかな。

俺が暴れた余波で封印が弱まって、そのせいで、妖怪や悪霊が強力になって暴れ、その戦いで犠牲が出てしまった」

業火が唇を噛み締めながら、辛そうな表情をして言う。

「それは業火様のせいではないですよ」

「だが俺が封印を弱めなかったら、あの妖怪たちが凶暴化する事もなかった」

業火が目を瞑って悔いる。

亡くなった死者たちの事を、思っているのだろう。

「業火様……」

だがそんな辛そうな業火を静和は見えていられず思わず抱きついてしまった。

ガバツと抱きついた、静和は力を入れて強く抱きしめる

「何を……」

突然抱きつかれた事で鼻孔をくすぐる甘やかな匂いと柔らかい

感触に、業火は戸惑い、離れようとするが、静和は離してくれない。

「業火様は悪くありません」

静和が業火の耳元で囁く

「いや俺は……」

「悪くありません！」

静和が業火の言葉を遮ってきっぱり言う。

「業火様はすきで暴れてないじゃないですか。
あれは守るために力を使って、その結果暴走したんじゃないで
すか。」

だから業火様は悪くありません」

「俺は悪くないか 本当にそう思ってるのか？ 人を殺してる
んだぞ」

業火は静和に真剣な表情を向けながら、言う。

嘘は許さんとその顔が、物語ってる。

だが静和はその気迫に、けをされる事もなく先ほどと同じ言葉を繰り返す

悪くありませんと

それを聞いた業火は、疲れたような表情をする

「何故そう思う？」

納得できない業火は更に静和に問いただした。

「業火様が幸太様を殺したのは、正当防衛です！ あの二人は業火様を殺そうとしてました

それにあの二人は、罪のない使用人を殺してます。業火様が怒って当然です」

静和が強い口調で断言する

「そうか……そう思ってくれるか
ありがとう」

業火は心の底から礼を言った。

嬉しかったからだ 事件後の一族の会議では、死をもって償
わさるべきという意見も少なくなかった（まあ剛主が強権をもつ
て退けたが）

一族のものたちすら、家族などの一部の者たちを除いて、嫌わ
れているのだ。普段から一族によって虐げられてる（むろん業火は
そんな事しないが）

風牙衆の中に、あれほどの事件をおこした自分を許してくれる
者がいるのが、 単純に嬉しかったのだ。

（ん？）

嬉しかったのだが、 業火は静和の言葉に妙なひっかかりを、覚
えた。

（確か今……）

「業火様どうかしましたか？」

急に業火が黙ってしまったので、静和は不思議に思う。

「なあ 静和」

業火は低い声で、ゆっくり言いながら、静和との抱擁を解いた。

一瞬静和は名残惜しそうな、表情をしたが、すぐに切り替え

「はい何でしょう」

と業火の呼びかけに 応じた。

「何でお前俺が、幸太殺したり、使用人があいつらに、殺された事知ってるんだ。

あの事件は、完全に隠蔽されたはずだ。

東京の宗家に対しても、強大な妖魔の大群に襲われたと、報告されてるんだ。 隠蔽の徹底のため、 事件関係者同士の、接触

すら禁じられた んだ。

おかげで俺は、亡くなった者たちの葬儀にすら出られなかった。

宗家すら騙すほどの徹底した隠蔽だ。

だから俺が当時暴れたのを、ちゃんと知っているのは一部の人間だけのはずだ。

何で静和が知っているんだ」

業火が静和にきつい口調で聞く

「はい？」

業火の質問を聞いた静和は、最初質問の意味がわからず、首を傾げたが、しばらくして、意味に気づくとおずおずと答えた。

「あの私あの事件のおりは、業火様と一緒にいましたがただ業火様が幸太様を神炎で消滅させた後に意識失ってしまったんですけど、覚えてませんか？」

予想外の答えが返ってきたので、今度は業火が戸惑った。

「馬鹿な！ そんな近くに風牙衆が潜んでいたのか？」

業火は驚いて、静和を見る。

業火の答えを聞いた、静和は寂しそうな顔をする

「どうした」

静和の表情を見て、業火は何か悪い事したのかと、不思議に思いながら聞く

「業火様、鍛錬所で再会した時、誰だと聞きましたが、あれはからかったのでも、冗談でもなかったのですね」

言い終わった後、静和は大きなため息をついた。

「再会だと？ 俺たちは以前に会った事があるのか？」

業火はそう言った後、腕を組んで考え込む

「はい三年のに会っております」

「三年前だと…… まさかあの時幸太に腹を貫かれた風牙衆の少女がお前なのか？」

「そっぴや風祭静和って聞いた名前だと思っていたが、死んでなかったのか」

業火は静和をじろじろ見ながら言う。

「死んでません!!」

直後鼓膜を潰すかと思うほどの、大絶叫が辺りに轟いた

「なるほど……ヒーリングを自分に使って自己治癒したという訳か」

「はい。それに黙って業火様を見舞いに行った私を、心配して姉が来ていたので、業火様が暴れてる間に、私は姉によって、母に治癒術をかけて貰いました」

「そうだったのか。 静和の母も治癒術が使えるのか」

「はい。 それに母は私より、優れた術師です」

と静和が答える。

（やれやれ、やっと機嫌がなおってくれたぜ）

静和の機嫌がなおったのを見て、業火はほっと胸をなで下ろした。

静和が叫んだ後、業火は慰めるのに、一苦労したのだ。

泣き崩れ落ち、業火様ひどいですと罵る彼女に、土下座までしてやっと機嫌がなおったのは、今から 二分前の事である。

「ところで話は変わるが、その目はどうしたんだ？」

業火は静和の気になっていた、眼帯の事を聞く。

「これは……事故で……失いました」

静和は言いにくそうな感じで途切れ途切れに答えた。

「そうか。」

大変だったな」

業火は静和の様子から、言いたくないのを判断し、それ以上聞かない事にした。

（ 後日真相を知り ブチ切れるのだが、 それはまだ先である ）

「業火様、私もお聞きしたい事が、あるのですが、宜しいでしょうか」

業火の質問に答えた、静和は次は自分の番だとばかりに、話してくる。

「何だ？ 聞きたい事って」

業火が静和に返事する。

静和は業火から、許可を貰うと、続きを話します。

「私が失神した後業火様は、しばらく逃げた哲志様を探して、暴れまわったんですね」

静和が確認するように聞いてくる

「ああそうだ」

「それで最終的には、聖様や劫獅様に 捕らえられたんですね」

「そうだ」

「でもその時には、業火様は気絶してたと聞きました」

「で、それがどうしたんだ？」

業火がなげやりな感じで答える。

「そこです業火様を気絶させる何て一体誰がやったんですか？

神炎使いである業火様を」

「神炎使いじゃねえ」

静和が喋っているのを、遮り業火は否定する

「俺は神炎使いじゃない。

あの時は神炎の力に興奮し暴走して、制御出来なかったし、あの後炎術を封印されたから、神炎は今使えない。

親父が最初から緩い封印にしてくれてるから、黄金の炎は問題なく使えるが、神炎はまだ取り戻せてない。まあもちろんずっとこのままには、しないがな」

業火は己の決意を静和に、はっきりつけた。

「業火様なら大丈夫です。」

それで話しは戻りますが、誰が業火様を止めたんですか」

静和は興味津々の様子で、業火に聞いてくる。
よほど気になるようだ。

そんな静和の様子を見て、業火はため息をつく

それから億劫そうに、気が進まない感じで、渋々答える

「女だよ。」

当時この島の近くで、退魔した後、神凧一族の分家に挨拶に来てた、ある炎術師の一族だったらしい。その炎術師の一族の子供の一人が神炎使いで、俺をあっさり気絶させたんだ」

業火は、嫌そうな顔をしながら言った

「神炎使い？ では神凧宗家の方が、島に来られたんですか」

静和が驚く

「いやそうじゃないらしい。」

俺をぶっ飛ばした奴は、年は俺より二つ三つぐらい上だと思う。

悪いなあまり事件当時の事は覚えてないんだ。

ブチきてたし、子供だったからな、今言った事のほとんども兄貴に聞いた事だ」

業火が静和に、すまなさそうに言う

「そうですか。」

でも神凧宗家以外で神炎を使うなんて、そんな人たちがいるんですか？」

静和が信じられないという表情で言う。

「いるんじゃないのか？神凧の初代宗主が契約者になってから、千年たってたんだ。」

その間に一人や二人いてもおかしくないだろ。

でもまあ炎術師としてちゃんと一族としてあつて、神炎を使うとなると、黒野家しか俺には思いつかないな」

「黒野家ですか」

「ああ百年の歴史しかまだない一族だが、力量は神凧に勝るとも劣らないって、評判だ。」

向こうは神炎を聖炎と呼ぶらしいがな

「

「じゃあ業火様を気絶に追いやったのは、その黒野家宗家の神

炎使いなんですか」

「多分な。

俺の神炎など、漆黒の髪を腰まで伸ばしその髪と同じ黒炎の神炎を使う、あの炎術師の前じゃ、児戯に等しかった。

繰り出す炎術の数々をあっさり破られて、手も足も出ずに負けちまったよ。

神炎使いとしての、練度が違いすぎた、恐らく十歳ぐらいかあるいはもつと下の頃から神炎に目覚めてたんだろう。

そんな天才にろくすっぱ制御も出来てない神炎など、効くわきやねえよな」

業火が自嘲気味に 言う。

「黒炎使いですか その年齢で神炎を使うなんてとんでもないですね。

それで黒野家のどなたなんですか？」

静和が身を乗り出して聞いてくる

それに業火は素っ気なく答える。

「知らね。 気絶させられた俺が意識を取り戻したのは、3日経ってからだったから、その間に島離れちまったから、名前まではわからない。

兄貴たちに聞いたたら、黒野家の術師しか教えてくれなかったしな。

まあ神風が分家とはいえ、黒野家に助けてもらったなんて、表だって言えないし、宗家にバレたらお咎めは必死だしな……でも
ういいか。

負けた話なんて、女の前で言うのは、あまりいい気分じゃない
んだ」

業火が頭を搔きながら、ばつがわるそうな感じで言う。

「すみません。

わざわざ教えて頂いて」

「別に構わないよ　ただ他言無用で頼むぞ」

業火が念を押すように言う

「わかりました。　誰にも言いません　そのかわり業火
様も私と母が治癒術を使える事は誰にも言わないで下さいね」

静和が業火に手を合わせてお願いする。

「わかってるよ

……おっと大分話し込んでしまったな。

さっさと風祭家に行こうぜ」

業火が静和に言う

「わかりました。 そんなに遠くないので、ゆっくり歩いて
行こうと思ってましたが、業火様が早く着くのが、お望みでしたら、
飛んでいきましょう」

「助かるぜ」

業火がそう言った後、静和は業火の手を掴むと素早く風の精霊を喚
んで、二人は空の旅と洒落込むのだった

「水の中とは厄介だな」

業火が美少女と空の旅を楽しんでいた 同じ頃 とある湖で
ある少年が退魔の真つ最中だった。

茶髪の髪に、女と見紛うばかりの、容姿をした美少年である
彼はその美しい顔を歪め、忌々しそうに湖を見た。

彼が湖をしばらく見ていると、突如湖の中から次々と巨大な蟹が
現れた。

奇怪な蟹である、四本のハサミと8つの足を持ち、そのハサミは
熊でも両断出来るほどに巨大である そんな蟹が わらわらと、
三十匹ほど湖から飛び出してくる

飛び出してきた蟹たちは、少年めがけて、ハサミの雨を降らせてくる。

「はあゝ」

そのこうけいを見ながら、少年はため息を吐いた

「うつつうしい奴らだ」

少年はそう言った後、片手を横にブンッと振る

少年が振り終わった後、炎の壁が現れ、ハサミを振りかざして飛びかかってきた、化け物蟹たちが 触れた端から、次々と焼き尽くされ、消滅した。

その間僅か十秒程で、少年の実力が一流どころか、超一流に達しているのが、窺える。

少年は自身が作った炎の壁に焼き尽くされていく、化け物蟹たちを、気だるげな様子で見た。

「これで約五十匹は倒したか、だが水底にいる親玉蟹は動かずか。

手下に戦わせて、自分は水底からは出ないで、指揮だけとるつもりか」

少年はそう言いながら、手で顎に触って思考に耽る

（みくの奴、一人で楽勝とは言ってたが、炎術師に水属性の妖魔

退治の依頼持つて来るなよな

特に予定が入って切羽詰まってる時によ……やべ鈴との待ち合わせ時間まで、後二時間しかないぞ

このままモグラ叩き見たいな事やってたら、遅刻しちまうぞ。せっかく鈴が奢ってくれるっていうのによ。

湖ごと燃やせねえ事もないが、罪のない魚や生き物巻き込むのはな。かといって湖に飛び込んで、水底にいる親玉倒すのもな。

倒せない事はないだろうが、濡れるし敵の有利な場所で戦ったら、手傷ぐらいいは負うだろうな

炎を制御して水底にいる親玉だけ焼いてもいいが、それだと疲れるな。

中級クラスなのに、妙に力がありやがる。
神炎でごり押しするか。

でもこの程度の敵に神炎使うのもな。

相性が悪いんだよな……待てよ相性がやってみるか)

何かを思いついた少年は、魔力を集中して炎を生み出す。

たちまち彼の周りを強大な炎が包む。

「さーてとつとと終わらせるとするか」

少年は自分の周りに生み出した炎を両手の平に、集めその炎を圧縮しだす。

ただでさえ、強大な少年の炎が圧縮され、さらに強化される。

「よ〜しいい感じだ」

圧縮され力増す己の炎を少年は満足気に見る

湖からの襲撃はないので、少年は余裕を持って、術に集中出来る。

すると少年の手にある、炎が妙な何かが弾ける音を出し始めた。バチバチつと音がはぜ、やがて炎が雷となった。

雷もまた熱量、少年は意志の力と強大な魔力で雷を作ったのだ。

雷を纏いながら、少年は術をより強力にするため、本来はあまり必要ない呪文を唱える

「雷炎よ、焼き尽くせ 雷炎包围陣」 少年が生み出した、雷の炎が少年が呪文を唱え終わると同時に、少年の手元から ほとばしり、青白い雷撃が、湖全体を包み、眩い輝きを放ち、バチバチバチー！！と雷鳴が辺りに響く。

やがて青白い光は消え、雷撃も止み湖に静寂が訪れる。

「終わったな」

湖から邪悪な妖気が完全に消え去ったのを、確認した少年は、自分の勝利を確信するのだった。

「お疲れ様由希」

少年が勝利の余韻に浸っていると、いつ現れたのか背後に少女がいて、声をかけてきた。

背の低い、小柄な少女である。
年は少年と同じくらいか。

金髪のツインテールに 非常に可愛らしい顔立ちをしている

だが最大の特徴は、 その小柄な体型に不釣り合いな巨乳である。

この少女の名は有馬みく、少年の黒野由希の大親友で、少年が所属する 紅という退魔チームの仲間である。

「みくか。」

びつくりさせるなよ、いつきたんだ」

由希はみくの労いの言葉に答える

「さつきよ。」

それにしても…… 凄いわね」

みくが呆れた表情で、由希が浄化した湖を見る。

「炎で雷を生み出して、水底にいる、海魔たちを焼き払う
炎で雷を生み出せても、ここまでの威力を出せる術者はなかなか
いないわ。しかも対象限定で、標的だけ焼き尽くし水中の他の生
き物達には、感電させるどころか、何の影響も与えず、雷撃が起こ
った事すら気づかせない。」

これだけの完璧な制御は、黒野家なら由希以外なら当主
神風宗家なら蒼炎の蔵馬か宗主重悟ぐらいしか出来ないわね」

みくがその出鱈目ぶりに呆れながらも、 由希を賞賛する

「そんなに対した事じゃない、雷を生み出すのは健でも出来るし、
俊だって出来るさ。」

まあ健は雷を風で、 生み出したら、速さが削られるって言うて、
そんな事しないけどな。」

俊なら色んな属性使えるから、雷以外の効率いい攻撃するだろう
けどな」

由希はみくの賞賛を軽く受け流す。

ちなみに俊と健と言うのは、彼の仲間だ

「そういや俊で思い出したけど、今あいつ邪竜島に行ってるんだ
ってな。」

神風一族の辺境の分家が治めるあの呪いの島に」

由希が厳しい表情をして、みくに言う

何か思うところがあるようだ

「ええ。 知り合いの治癒術師のお手伝いに言ってるわ。

報酬が高いって、喜んで行ってたわ、由希あの島を知ってるの?」

とみくが由希に聞く

それに由希が、空を見ながら答える

「昔、近くで妖魔退治をした後、一応近くに来たから挨拶しとこ
うって、氷雨さんが言って立ち寄ったんだ」

「ふゝんそんな事があつたんだ。

俊と健は一緒だったの」

「健は一緒だったけど、俊は一緒じゃなかった。

それで島を管理する 三分家の一つに挨拶しにいったんだ

でその夜に一騒動あって、氷雨さんが火野家に（島を管理する三分家の一つ）助力を頼まれてな。

俺も手伝ったんだ

氷雨さんだけじゃ荷が重かったんでな」

「一騒動って何があったの？」

「島の子供の術師が、力を暴走させて大暴れしたんだよ
それを俺が、倒したんだ」

「へえそんな事があったんだ。」

由希がわざわざ倒したって事はその子強いんだね」

「まあな。」

完全に制御出来てなかったけど、神炎使ってたし、体術が優れて、結構手こずったぜ」

由希が思い出しながら言う。

「そんなに強い子なら、今度の交流試合に出てきたりするかもね。」

交流試合出るんでしょう由希」

とみくが由希に好奇心いっぱい聞いてくる

ちなみにみくが言った交流試合とは、ひと月後に迫ってる、黒野家と神風家の合同修行のうちに、行われる、総当たり戦による組手試合の事である

宗家から四人 分家から三人の計七人の 同士の14人の腕利き術師同士が戦うのである

「ああ当主から頼まれてるからな。」

相手はまだ決まってるがな」

「でも神風って、何ヶ月か前に配下の風牙衆の謀反で、かなりのダメージ負ったはずよ。

分家の名のある術師は大半が死んだみたいよ。宗家は一人入院しただけで済んだそうだけど」

「らしいな。

でも今回の発案は、警察内の退魔組織特殊資料整理室の室長何で神風も断れなかったんだってよ」

「ふゝん特殊資料整理室か。

やり手の室長だって 噂に聞いているわ」

「らしいな……

さてとじゃあなみく。

後始末は任せたぜ 鈴が待ってるんでな あいつ由希に嫌な思いさせたから、償わせてくれて言っで、高級ディナー奢ってくれるんだよ」

由希が嬉しそうに言う

「はいはい。

のろけてないで、さっさと言ったら？

すゝちゃんの事だから待ち合わせ時間より早く来て由希の事を待ってると思うよ」

みくが手をしゅしゅと振りながら、由希に言う

「ありがとうな。」

「じゃあ行くわ」

由希はそう言うと同時に、炎術で炎の翼を生み出して、肩から生やす。

そして飛び立とうとする

「由希！」

みくが呼びかける

「何だ、まだ何かあるのか」

「すくちゃんは、初めてのはずだから、
優しくリードして上げて、ちゃんと避妊してあげるんだよ」

みくがニヤニヤ笑いながら言う

「飯食いに行くだけだ！

そんな事はしない」

由希は顔を真っ赤にしながら、否定した後。
炎の翼で飛んで行くのだった。

それを見上げながら

「そんな事言って、 常にコンドーム忍ばせてるの、 みくは知ってるんだよ」

みくは温かな目をして友人の恋を心から応援するのだった。

ひと月後再会した由希を見て男と知って業火は驚くが、恋に燃える、少年が知るはずもなかった。

第四話（炎の少年の決意と風の少女の思い）（後書き）

いかがだったでしょうか。

少し長くなってしまいましたね

ちなみに雷炎とか炎の翼というのは、自分による創作です

本来黒野由希は英語の呪文使うのですが、高校時代英語赤点の自分には、英語は無理なので、日本語です。

充電を終えてパワーアップして復活した カナタさんのサタンオ
ブブラックファイヤーも宜しく願います

ではご意見 ご感想など待っております

ありがとうございます

第四話番外編

（神風の闇と桑島俊彦の災難）

（前書き）

こんにちは。
最新話です

第四話番外編（神凧の闇と桑島俊彦の災難）

「それにしても結構広い島だよな」

テクテクと桑島俊彦はもの珍しそうに、島内を散策していた、夕食の集まりまでまだ三時間はある。

さてどうやって時間を潰そうと、俊彦が考えていると

「なんだ？」

俊彦の耳に人と人が争いあう声が聞こえてきた。

「気になるな」

悩んだ末俊彦は、声が聞こえてきた方向に行く事にした。

「貴様よくも兄貴に怪我をさせたな」

17歳ぐらいの少年が15歳ぐらいの少年を足蹴にしながら、罵っている

他にも三人の少年がいて、それらも暴力は振るってはいないが冷たい馬鹿にしきった目で、足蹴にされてる少年をみている。

どうやら足蹴にしている少年たちの仲間のようだ。

足蹴にされてる少年は、悔しさに顔を歪めながらもそれでも暴漢に屈する事なく、憎々しげな目で足蹴にする少年を睨む。

絶対に屈するものか　その強い意志で少年は理不尽な暴力に耐えていた。

少年は神島家に仕える風牙衆である。

神島家は火我　火野　燈野の次に力がある神風分家である。

今少年に暴行を加えているのは、神島家の術者たちである。

少年には妹がいる、　まだ12歳の少女だ。

この妹が神島家の跡継ぎ神島陣太郎に犯されたのが一週間前。

処女であった妹は前も後ろも犯られ、そのショックで自殺を図った幸い母親が気づいたので、死にはしなかったが、心も体もぼろぼろにされた少女は、男性恐怖症になってしまい、身内でも男の手が触れただけで拒絶するありさまだ。

男はサンドバッグか奴隷

女は性欲処理の道具　というのが、神風一族の共通の認識である。

殺害してももみ消されるのだから、レイプなど気にも止められない。
い。

しかし少年は許せなかった。

そしてついに今日こっさり忍び込み、妹の貞操奪った獣の右腕を風で斬りとばしたのだ。　しかし標的がどでかい悲鳴を上げたため、他のものに見つかってしまい追いかけると、とうとう捕まってしまったというわけだ

（くそ！　どうする？　……このままやられちまうのか）

薄れゆく意識の少年を絶望が包む

しかしすんでのところ、少年は耐える。

（どうせ、神風への反逆は決まったようなもんだ。

先はもうない。

ならば死なばもろともだ）

少年は己の死を覚悟すると、自分を舐めきっている神風術者たちに、一矢むくいるべく、風の精霊を集め出す。

（まだだ！）

少年はすでに限界にきているのに、さらに精霊をよぶ

その数は八神和麻とは比べるべくもないが、亡き風牙衆の長

風巻兵衛は超えていた。それほどの力が少年に集まっているのに、

愚か者たちは暴力に酔っていて気づかない。

一方少年は自分の限界を超えて引き出したその力を、一矢むくいたいという、その一心だけで制御していた

そして少年はひたすら待った。

チャンスが来るのを、そのチャンスは思ったより早く訪れた。

「おい！ お前らもこっちこい、一緒にやろうぜ、こいつ痛めつけるの」

さつきから風牙衆の少年を蹴っている、神風の少年が遠巻きに見ている仲間を手招きしてよぶ

「いいんですか？」

4人がかりでやったら、こいつ死んじゃうんじゃないですか？」

ぼろ雑巾のようになった、風牙衆を見ながら、取り巻き連中の一人が言う

むろん風牙衆を案じて言っている訳ではない、自分たちのリーダーに殺してもいいのか、面倒ではないのかと確認を取っているだけだ。

しかし足蹴にしているリーダーの少年はそんな取り巻きの心配を一蹴する

「何言ってるんだ。」

こいつは兄貴を怪我させたんだぞ！

それにこいつは恩を仇で返しやがったんだ。先の風牙衆の反乱には加担していないって言う、こいつらの言い分を信じて、

火我家や火野家の当主様はお咎めなしとしたんだ

東京で反乱を起こした風牙衆はほとんど粛清されたのにもだ

（実際は洗脳された 風牙衆の術者たちを 和麻が手間を減らしてやると言って、ほぼ皆殺しにしたのだが、辺境の島にいる この少年が知るはずもない

実際に神風によって成敗されたのは、流也と兵衛の二人だけである）

全く火野も火我も甘いんだ。

俺の親父も燈野の当主も風牙衆に子供を人質に出させ、厳重な管理をするべきだと進言したのにはねつけやがったから、こいつう目にあうんだ。二度とこんなことにならないように、ここで奴らに自分の立場つてものを教えてやるんだ。とりあえずこのガキを血祭りに上げるぞ」

と高らかに宣言する　しばらく三人は、互いの様子を伺っていたが、やがてゆつくりとリーダーのもとに歩いていった

（早く来い！）

ボコボコにされた風牙衆の少年はうつぶせになりながら、笑っていた、集めた風の精霊たちはすでに潜ませているので、気づく心配はない

後はこの風を超至近距離で急所に叩きこめばいい

（さあ早くきやがれ、お前らが馬鹿にする風術の凄さを教えてやる）

うつぶせの状態で風牙衆は虎視眈々と　待つ

そこに自分たちが獲物とは気づいていない、愚か者たちがやってくる。

「もう死んでるんじゃないですか？」
取り巻きの一人がリーダーの少年に聞く

取り巻きの質問に、リーダーは邪悪な笑みを浮かべると、

「じゃあ調べてみるか」

手のひらに炎の球を生み出した

「こいつをぶつけて起きなかつたら死んでるさ、死んでたらそ

のまま跡形もなく燃やしちまえばいい。
葬式の手間が省けるってもんだ」

ギヤハハと嫌らしい笑みを浮かべて言う

「わかりました」

取り巻き連中は返事すると、炎を喚び出すべく、集中しだす

（まだ、もう少し）

炎術師が4人で包囲し、炎を喚ぶという危機的状況なのに風牙衆の少年はまだ動かない

（発動はこっちの方が早い、あいつらがこっちに攻撃を撃ち込むその瞬間に、仕掛ける）

そして機は熟した

「よし一斉に放つぞ1 2」

リーダーの少年が かけ声をかける。

そのタイミングに取り巻きが合わせる

「の三！」

神風の術者が炎弾を 倒れている風牙衆めがけて放つ

（今だ！）

風牙衆の少年が、炎を放ち、完全に無防備になった、炎術師たちに、高速の風の刃を放つ

シュンと風の刃は4人の炎術師の首めがけて正確に飛んでいく

「何！」

「風！」

「まだ意識が」

その風の刃に炎術師たちはやっと気づいた。

しかし炎を放った後なのですぐに防御の炎を集められない

一方炎術師たちの炎も全て、倒れ伏す風牙衆に向かっていく

（相討……ちか……）

何とか上体を起こし、反り返りながら炎術師たちに向かっていく風の刃と自分に飛んでくる炎を見た後目を閉じる

「こんなところで死ねるか！」

リーダーの少年は、迫る風の刃に怯えながら、叫ぶと傍らにいる取り巻きの一人を掴んだ

「壮貴様？」
そんき

掴まれた取り巻きの一人がリーダーの名を怪訝な感じで呼ぶ

「盾になれ」

と無情につげ、自分の前に立たせる

その無防備な首を

斬りとばすべく、風の刃が飛んできて そして消えた。

「は？」

必殺の刃が目の前で突然消えたのを見て、神風の術師たちは狐につままれたような、顔をしてお互いの顔を見た

風の刃だけではない、神風の術師たちはまだ気づいていないが、彼らの放った炎も綺麗さっぱり消えていた。

そこに存在していたのがつい怪しいと思ってしまふほど、完全に炎弾と風の刃は文字通り消えてなくなっていた

第四話番外編 (神風の闇と桑島俊彦の災難) (後書き)

いかがだったでしょうか。

ではご意見 ご感想など待っております
ありがとうございます

第四話番外編（神風の闇と桑島俊彦の災難2）（前書き）

今回は短いです

第四話番外編（神凪の闇と桑島俊彦の災難2）

（どういう事だ？）

風牙衆の少年は、不思議に思っ
て恐る恐る、閉じていた目をひらいた。

目をひらいた少年はその光景を見て、自分が不思議に思った事が勘違いではなく、実際におこった事なのだと確信した

「一体何が起こったんだ？
だが間違いない今までいたはずの精霊たちが消えた？」

こんな事は有り得ない。
少年はそう思う

だが現実には精霊たちはいなくなっていた。
少年より大分遅れてそれに気づいた壮貴たちも混乱し辺りを見渡す。

「はいそこまで」

そこへ気の抜けた感じの聲が聞こえてきた

声の主は騒ぎを聞きつけて駆けつけた 桑島俊彦だった。

（やれやれこんな事が平然と行われてるとは、黒野もひどいがもっとひどいな、上には上がいるもんだぜ）

俊彦はため息をこぼしてから、風牙衆の少年を見る

「大丈夫か？ 事情は先行させた式神からの情報で大体わかってるけど」

そう言いながら、俊彦は上空を指差す

指に釣られて風牙衆の少年が上空を見上げると、そこにコウモリが一匹いたので、風牙衆の少年は驚愕した

全く気づかなかつたからだ

というより桑島俊彦が現れた時にも気配は感じなかった
探査に長けた風術師である自分がだ

その鮮やかすぎる手並みから桑島俊彦の力量を知った風牙衆の少年は、体をぶるぶると震わせて戦慄する

「おい耳がやられちまったのか？
大丈夫かって聞いたんだが」

反応がなかったので、仕方なく俊彦は再度呼びかける

「あつ、はい大丈夫です。
あのあなたは」

俊彦に慌てて返事をした風牙衆の少年は、その後突然現れた

乱入者の名を聞く

その質問に桑島俊彦は面倒くさそうに、頭を掻きながら答えた

「俺は桑島俊彦、この島にある神風分家、火野家からの依頼を受けた知り合いの手伝いに来た符術師だよ」

「桑島俊彦さんですか」

風牙衆の少年はその名をどっかで聞いたような気がしたが、思
い出せなかった

「でお前の名前は？ こっちは名乗ったぞ」

桑島俊彦はそう言って少年をじろりと見る

その鋭い視線に慌てて、少年は答える

「すみません。」

申し遅れました僕は おとなしくける 音無武この島の神風一族に仕える風牙衆で
す」

武はそう言いながら頭を下げる。

「音無武ね。」

じゃあその音無君に聞きたいんだが、あいつらは誰だ」

武の自己紹介を聞いた後俊彦は、次にさつきからずっと無視していた神風一族の術者たちを指差す

「武で結構でございます桑島様、あれは神風分家神島家の次男神島壮貴様とその分家神本家の術者の方々です」

武は俊彦が指差した方を見ながら、質問に答える

そこへさつきから無視されており、その上指差されモノ扱いされた取り巻きの一人が怒りの声を上げる

ちなみにその取り巻きは先ほど壮貴に盾にされた少年である

「おい teme エ！」

そいつをこっちによこしやがれ、助けてりしたら、お前のためにはならんぞ。そいつは陣太郎様に手傷を負わせた、罪人なんだからな」

そう大声を張り上げて、武を指差す

「本当か」

俊彦が鋭い眼差しで武を見る

武は最初、俊彦の視線から逃げるように目をそらし、苦い顔をしていたが、観念して頷いた

「でもそれは神島陣太郎が、僕の妹をレイプしたからなんです」

その後武は辛そうな顔をして、俊彦に襲った理由を告げる

さらに武は警察に訴えてももみ消される、賠償金も払ってくれないと続けた後、齒を噛み締めて憎々しげに炎術師の少年たちを見た

「わかった嘘は言ってないな」

その様子を見た俊彦は小さく呟く

「そういうわけでそいつは罪人なんだ　引き渡して貰うぜ」

盾にされた取り巻きが、勝ち誇った顔をしながら、武に近づこうとする

「いや引き渡さねー」

俊彦の一言がそれを止めた。

「何！」

盾にされた取り巻きは怒りの形相で、俊彦を見た。

「貴様どういっつもりだ」

他の取り巻きたちも高みの見物はやめて、俊彦を囲む

壮貴だけは動かず、様子を見ている

「どういっつもりも何も、話聞く限り自業自得じゃんそれにこ

の武が多分14歳ぐらいだからその妹って言ったら、13か12じゃねえか。　そんなロリコン野郎が復讐されたって文句言えないっての」

この俊彦の発言に取り巻きたちがさらに食ってかかる

「ふざけるな貴様風牙衆の肩をもつのか」

「そうだ。　それにレイプなどではない　　風牙衆ごときに陣太郎様はお情けを与えたのだ。
恨まれる言われない」

「それにこいつらは、俺たち神風の所有物だ、どうしようが俺たちの勝手なんだよ」

そう言つて手前勝手に傲慢なセリフを次々と俊彦に浴びせた
それを俊彦は軽く聞き流している

そつしながらも俊彦は一人話の外で様子を窺う、壮貴から目を離さずにいる。

壮貴の動きを警戒しているのだ

そんな俊彦や取り巻きたちの様子を見ていた武は笑いをこらえるの必死だった。　この期に及んでも彼らは気づいていない　自分たちの絶対の力炎術が封じられている事を、自分たちが　絡んでいる相手が、　自分たちよりも格いや次元が違う超一流の術者であることを　　彼らは知らない

「この野郎なめやがって」

自分たちの話を全く聞かず無視している俊彦にキレた取り巻き連中はとうとう実力行使に出ることにした

困んでいる状態から炎の精霊を喚ぶべく集中を開始する

「ハアア」

「ホオオ」

「吠え面かせてやる」

そんな取り巻き連中の様子を俊彦は呆れた表情で見、武は笑いこらえるため舌を噛みながら見る

五分後

「戦闘中に瞑想するなんて、随分信心深いんだな神風の術者は」

俊彦は大きなあくびをした

第四話番外編（神風の闇と桑島俊彦の災難2）（後書き）

いかがだったでしょうか。

ではご意見 ご感想など待ってます

ありがとうございました

第四話番外編（神風の闇と桑島俊彦の災難 3

井の中の蛙大海を知らず）（前

遅くなりましたが

最新話投稿です

これにて番外編終了です

第四話番外編（神風の闇と桑島俊彦の災難3

井の中の蛙大海を知らず）

「何をやってるんださっさと攻撃しろ、相手は一人だぞ」

うんうん唸っている手下たちを見て、壮貴は怒りの声を上げた、だが手下たちがどれだけ集中しても 炎の精霊たちは応える事はなかった

「くそ！ 使えない奴らが、仕方ない俺が……うん？ 術が炎術が使えないだと」

「やつと気づいたのかよ。 炎術師は鈍いのが相場だけど、俺の知り合いや親友はもつとマシだぞ まあ親友は規格外過ぎるから、他の術師達と比べるのはかわいそうか」

はあ〜とあくびをしながら、俊彦は哀れみを込めた声で言う

「畜生一体どうなってるんだ」

壮貴は齒ぎしりしながら俊彦を見た

「はあ〜お前らみたいな馬鹿に説明するのは面倒からしたくないんだけどな」

俊彦はカリカリと頭を掻きながら、面倒くさそうに言う
まるで聞き分けのない子供を相手にしているような感じだ

「全く鈍いにも程があるな。」

お前らがばこつてた 風術師の方がよっぽど優秀だな。

あいつは俺が登場した時からとつくに気づいてたぞ。

もうわかっただろう 俺がお前らの前に現れる時に、精霊魔術を封じる結界を張ったんだよ。 と言つてもお前らの代名詞である黄金の炎が使えたら破れる代物だけどな、でも即興で作ったにしては上出来だろ」

と俊彦は不敵に笑いながら言う。

「何だと！」

（こいつは今何と言った？）

あまりにも自分を馬鹿にした敵の態度に壮貴の堪忍袋の緒はブチ切れた。

「ふざけるな！！ 俺たち神風一族の炎術師が風牙衆に劣るだと、笑えん冗談だ俺たちは偉大なる炎の精霊王様に選ばれた一族だ、こそこそ動き回って探ることしか役に立たない連中とは格が違つんだ

取り消せ今の言葉を取り消せそして謝罪しろ！ 偉大なる神風一族に無礼をはたらいてすみませんとな 本来なら極刑にするところだが、俺は優しいからそれで許してやる、さあそこに跪け」

壮貴は熱弁をふるいながら地面を指差す

しかし壮貴の熱弁に俊彦は何の反応もしなかった、それどころか

「おい立てるか、 立てないなら手かすが」

壮貴が話に夢中になつてゐる間に、風牙衆の少年の元に駆け寄つていたのである

完全無視

それが桑島俊彦の出した答だった

「ふ、ふざ、ふざ ふざけるなー!!」

怒りのあまり呂律が回らなくなりながらも、壮貴はそれだけ一言叫んだ後、感情の赴くままに、俊彦に殴りかかつて行つた、それをちらつと視界に入つた取り巻きたちも、慌てて 続き俊彦に殴りかかる

「はあゝ炎術封じてるって、わざわざ教えてやつたんだから、このまま尻尾巻いて帰りゃいいのに面倒やつら」

風牙衆の少年を心配げに片膝立ちで見ていた俊彦は、立ち上がり気だるげに、 殴りかかつてきてる4人の炎術師たちを見た。

「まあ炎使えないなら格闘しか手はないよな。

さてどうしようか？ 俺格闘はあまり得意じゃないんだよな。

それに殴つたら手痛いしな」

体中から気だるげな感じを出す俊彦を うつ伏せになつたまの風牙衆の少年武が、見上げ立ち上がるうとする

そんな武を振り返りもせず、俊彦は手を後ろに突き出し手のひらを広げて、その動きを静止する

「後で癒やすからしばらくそこでおとなしくしてな、心配いらねえよすぐ終わる」

俊彦はそう言つと、後ろに突き出した手を戻し、今度は前に手のひらを突き出し、殴りかかって来てる4人に狙いをつける

そして

「凍てつけ」

と一言呟いた

直後凄まじい冷気を肌で武は感じた。

「なっ！」

武が肌寒さに我慢しながら前方を見ると、今にも殴りかかるうとした状態で、神風の術師たちが凍りづけになっていた。

「その氷の中で頭冷やしな。

炎術至上主義の単細胞どもが、自分たちの運がいいのを、精霊王様に感謝するんだな。

健だったら今頃お前らはバラバラ死体になってるだろうぜ」

そう吐き捨てた後、俊彦は自分が凍りづけにした馬鹿どもを一度も見ず、次に　武少年の治療にあたる

「待たせて悪かったな、じゃあ今から治療にはいるからな」

俊彦はそう言って　ポケットから治療用の札を取り出した

圧倒的な力を見せつけられた武は、ただばー然と、俊彦を見上げて治療を受けるのだった

「何だこれは」

俊彦が武少年の治療終えて二人共去つて後、火野家からの帰り道を歩いてきた　火我聖は道端にある　氷の像を見て、首を傾げていた、だがすぐに見知った顔を発見し一族の者たちとわかる

「この顔は神島家の次男坊の壮貴か。　　どうやら魔術か何かで凍り漬けにされたみたいだな。

表情を見る限り驚いたり、怯えた様子が窺えないから、こいつらは自分たちが凍り漬けにされたのに、気づかないまま、凍らされたか。

いい腕だ　一体何者だ　？……　まあいい犯人探しは後にしよう

とりあえずこのままにしとくわけにはいかんから、この氷を溶かすとするか。

やれやれ完治したばかりだというのに、働かせてくれる」

凍り漬けにされた、壮貴たちを疲れた目で見ながら聖は 金の炎を顕現し、細心の注意をはらいながら、氷だけを焼き尽くすのだった

因みに馬鹿四人が氷結地獄から生還したのは、それから三十分後の事である

第四話番外編（神凧の闇と桑島俊彦の災難 3

井の中の蛙大海を知らず）（後

いかだったでしょうかではご意見ご感想 何でも待ってます あ
りがとうございました？

お詫び

風の聖痕二次小説

業火の炎を改めて書き直します　なのでこちらは完結とさせて頂き
ます

よりクオリティーの高い作品を書くには一から書き直すのが一番だ
と思いましたが　なおこっちは消さず　残しておく事にします原点
として記念に　今まで読んでくれた　方感想頂いた方ありがとう
ございました

良ければ新しく書き直した業火の炎（改良版）も読んで頂けたら
嬉しいです　？

では改良版業火の炎もよろしく願いします

後この作品に心よく　協力して頂きキャラ　を使用させて頂いた
かなた霞さんのサタンオブブラックファイヤーも改良版でも
引き続き出てきてもらう予定です

かなたさんのサタンオブブラックファイヤーもよろしく願いま
す

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6587m/>

風の聖痕 秘伝 （隠された血脈 業火の炎）

2011年5月20日17時46分発行